

東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類 (1)

1998

東京大学埋蔵文化財調査室

例 言

- 1, 本編は東京大学構内遺跡出土の江戸時代の陶磁器・土器について分類・整理したものである。
- 2, 本編の編集は執筆者全員で行い、執筆の文責は文末に記した。
- 3, 写真撮影は武藤康弘、遠藤 香が行った。
- 4, 本分類を執筆するにあたり以下の方々にご助言・ご教示をいただきました。深く感謝申し上げます。(敬称略, 五十音順)

足立順二, 稲垣正宏, 井上喜久男, 扇浦正義, 大橋康二, 岡 泰正, 小川 望, 加藤真司, 金子健一, 河合竹彦, 小西雅徳, 小林 克, 小林謙一, 佐野 元, 島 弘, 白神典之, 田口頌二, 長佐古真也, 中野高久, 中野晴久, 仲野泰裕, 中野雄二, 野上建紀, 服部 郁, 林 順一, 平田天秋, 藤沢良祐, 藤田邦雄, 宮田絵津子, 村上伸之, 桃井 勝, 森 達也, 森村健一, 両角まり

執筆者

安芸毬子, 大成可乃, 大貫浩子, 坂野貞子, 成瀬晃司, 堀内秀樹

凡 例

1、本表中の出土地点については以下のように省略して表記した。なお、現時点で東大構内において良好な資料がなかったものについては、他の遺跡の報告書から引用させて頂いた。

() 内は出土地点の掲載報告書名である。

* 東京大学構内遺跡

理：理学部7号館地点（理学部7号館地点）

御殿：御殿下記念館地点（山上会館・御殿下記念館地点）

法：法学部4号館地点（法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡）

文：文学部3号館地点（法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡）

中診：医学部附属病院中央診療棟地点（医学部附属病院地点）

設備：医学部附属病院設備管理棟地点（医学部附属病院地点）

給水：医学部附属病院給水設備棟地点（医学部附属病院地点）

外来：医学部附属病院外来診療棟地点（東京大学構内遺跡調査研究年報1）

葉新：薬学部新館地点（東京大学構内遺跡調査研究年報1）

工14：工学部14号館地点（東京大学構内遺跡調査研究年報1）

看宿：医学部附属病院看護婦宿舍地点（東京大学構内遺跡調査研究年報1）

工1：工学部1号館地点（東京大学構内遺跡調査研究年報1）

葉資：薬学部資料館地点（東京大学構内遺跡調査研究年報1）

家畜：農学部家畜病院地点（東京大学構内遺跡調査研究年報1）

病棟：医学部附属病院病棟建設地点（東京大学構内遺跡調査研究年報2）

数理：大学院数理学研究科Ⅱ期棟地点（東京大学構内遺跡調査研究年報2）

* その他の遺跡

経塚山西：経塚山西窯跡（経塚山西窯跡）

巢鴨Ⅰ：巢鴨Ⅰ（巢鴨Ⅰ）

三栄町：三栄町遺跡（三栄町遺跡）

内野山北：内野山北窯跡（内野山北窯跡）

内藤町：内藤町遺跡（内藤町遺跡）

丸の内三丁目：丸の内三丁目遺跡（東京都千代田区丸の内三丁目遺跡）

本郷追分：本郷追分（本郷追分）

尾張Ⅱ：尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅱ（尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅱ）

壺屋：壺屋古窯群Ⅰ（壺屋古窯群Ⅰ）

済海寺：港区三田済海寺長岡藩主牧野家墓所(港区三田済海寺長岡藩主牧野家墓所発掘調査報告書)

東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類 (1)

JA 1 (景德鎮窯系)



1 段目左から御殿 遺構外, 御殿 665
 2 段目左から御殿 532, 右は御殿 49
 3 段目左から御殿 252, 御殿 532, 工 14
 SK101

JA 2 (漳州窯系)



左から中診 遺構外, 御殿 遺構外, 御殿
 678
 左下は御殿 遺構外

JA 3 (徳化窯系)



左から中診 遺構外, 工 14 SK293

JA 4 (龍泉窯系)



1 段目右は看宿 SK299, それ以外は全て
中診 L32 - 1

JA 6 (朝鮮)



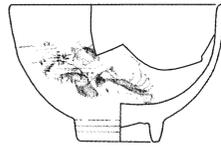
1 段目左は御殿 192, 右は看宿 SK299
2 段目は御殿 590

JA 8 (ヨーロッパ)



1 段目左および右下は給水 L37 - 1, 2 段
目
左下は中診 遺構外

JB-1-a

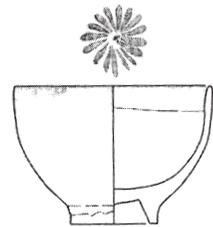


(御殿 532)

器種：碗

高台断面が幅広「U」字状、いわゆる初期伊万里

JB-1-b

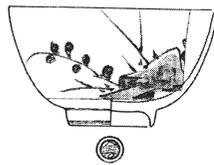


(御殿 532)

器種：碗

底部無釉

JB-1-c

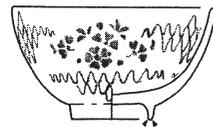


(御殿 678)

器種：碗

高台断面三角の製品、長吉谷窯指標

JB-1-d



(中診 F34-11)

器種：碗

高台断面シャープな「U」字状で高台高が高い、蓋付有、高尾窯IV～VI層指標

JB-1-e

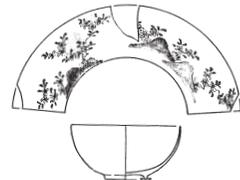


(中診 F33-3)

器種：碗

高台断面シャープな「U」字状で高台高が低い、蓋付有

JB-1-f

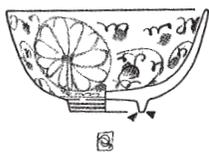


(中診 G20-2)

器種：碗

高台径が小さい半球形の薄手碗

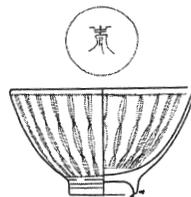
J B - 1 - g



(中診 L34 - 1)

器種：碗
絵付・作りの粗雑な碗

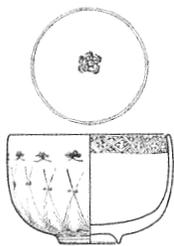
J B - 1 - i



(設備 AE35 - 3)

器種：碗
高台高が高い，慣用名一小広東碗

J B - 1 - j



(御殿 245)

器種：碗
高台径が小さい腰の張る碗，慣用名一小丸碗

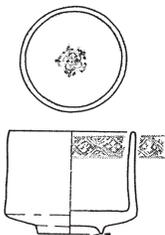
J B - 1 - k



(御殿 532)

器種：碗
大振りの筒形碗，いわゆる初期伊万里

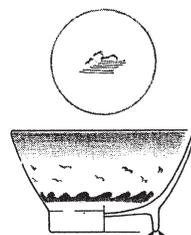
J B - 1 - l



(中診 E22 - 1)

器種：碗
筒形碗

J B - 1 - m



(給水 AJ37 - 3)

器種：碗
慣用名一広東碗，蓋付有

JB-1-n



(中診 H21-1)

器種：碗

端反形碗，蓋付有

JB-1-o



(中診 2号組石)

器種：碗

腰が張り，体部が直立する小振りの碗，
慣用名一湯呑碗

JB-1-p



(中診 H21-1)

器種：碗

高台から直線的に開く薄手の碗，蓋付有

JB-1-q



(中診 H21-1)

器種：碗

高台が「ハ」の字状に開く碗，大振りで
腰が張る，蓋付有

JB-1-r

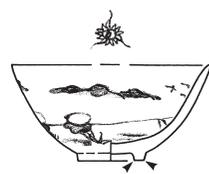


(工 14 SU307)

器種：碗

朝顔形，蓋付有

JB-1-s

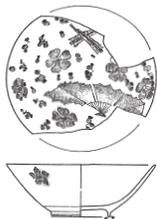


(工 1 SK01)

器種：碗

幅広の高台

JB-1-t



(中診 F34-11)

器種：碗

体部が直線的に開く大振りの碗，内側に主文様，慣用名一うがい茶碗

JB-1-u

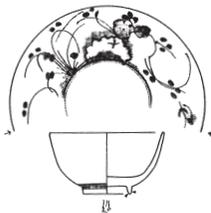


(家畜 SK09)

器種：碗

JB-1-d のやや小振りの碗形，コンニャク判が多い

JB-1-v

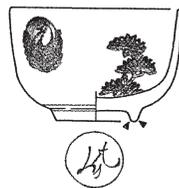


(中診 F33-3)

器種：碗

梅樹文が描かれた粗製の碗

JB-1-w



(中診 L34-1)

器種：碗

高台径が大きく腰の張る碗、コンニャク判が多い

JB-1-x

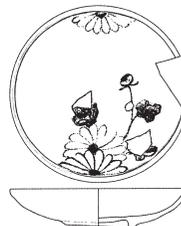


(外来 SU143)

器種：碗

見込み蛇ノ目釉剥ぎ，粗製

JB-2-a



(御殿 532)

器種：皿

高台断面が幅広「U」字状、いわゆる初期伊万里

JB-2-b

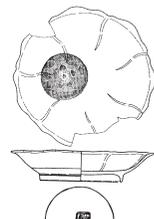


(理 1号井戸)

器種：皿

高台断面三角で高台径が小さい，ダンバ
ギリ窯指標

JB-2-c

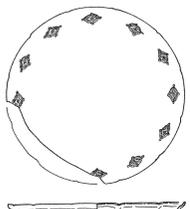


(御殿 678)

特徴：皿

高台断面三角で高台径が大きい，柿右衛
門B窯など指標

JB-2-d

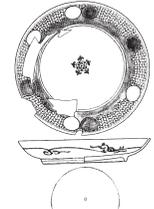


(中診 F34-11)

特徴：皿

高台断面がシャープな「U」字状で上質
の製品，南川原窯ノ辻窯指標

JB-2-e

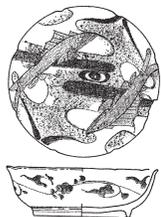


(御殿 537)

特徴：皿

高台断面がシャープな「U」字状

JB-2-f

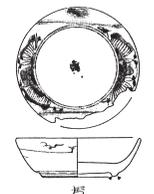


(中診 F33-3)

特徴：皿

やや深く，腰が張る，多くは輪花に成形

JB-2-g



(中診 2号組石)

特徴：皿

絵付・作りが粗雑な皿，扇面文様が多い

J B - 2 - h



(御殿 532)

器種：皿
蛇ノ目高台，いわゆる初期伊万里

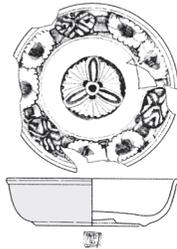
J B - 2 - i



(中診 H21 - 2)

器種：皿
蛇ノ目凹形高台で高台高が高い

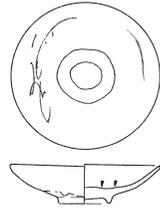
J B - 2 - j



(御殿 233)

器種：皿
蛇ノ目凹形高台で高台高が低い

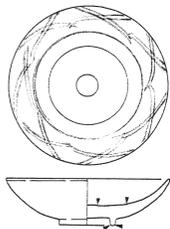
J B - 2 - k



(設備 Z35 - 5)

器種：皿
見込み蛇ノ目釉剥ぎで底部無釉

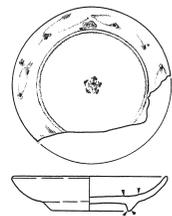
J B - 2 - l



(外来 SK174)

器種：皿
見込み蛇ノ目釉剥ぎで高台径が小，斜格子状が多い

J B - 2 - m



(外来 SK402)

器種：皿
見込み蛇ノ目釉剥ぎで高台径が大，梅花繋ぎ文が多い

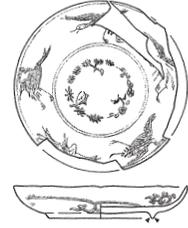
J B - 2 - n



(工 14 SK292)

器種：皿
鍋島

J B - 2 - o



(中診 H21 - 2)

器種：皿
器高が低く腰が張る皿

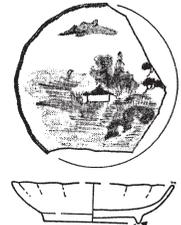
J B - 2 - p



(工 14 SU176)

器種：皿
浅手の端反，墨弾き雲形文，志田窯指標

J B - 2 - q



(中診 H21 - 1)

器種：皿
高台断面が「U」字状，輪花に成形，見込み全面に一枚絵

J B - 2 - r



(理 1号井戸)

器種：皿
糸切細工の貼付高台

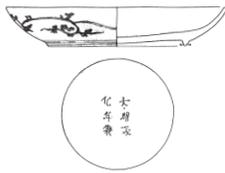
J B - 3 - a



(設備 Y48 - 1)

器種：大皿
いわゆる初期伊万里

J B - 3 - b



(中診 E22 - 1)

器種：大皿
断面三角, 「U」字状の高台

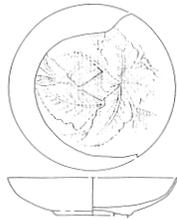
J B - 3 - c



(理 1 号土坑)

器種：大皿
高台内蛇ノ目釉剥ぎ

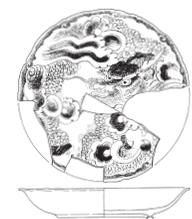
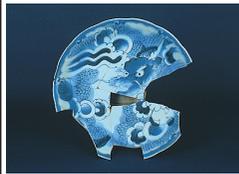
J B - 3 - d



(中診 K30 - 1)

器種：大皿
蛇ノ目凹形高台

J B - 3 - e



(工 14 SU295 上)

器種：大皿
浅手の端反, 墨弾き雲形文, 志田窯指標

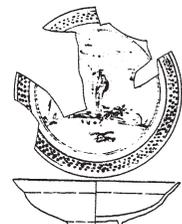
J B - 4



(中診 H21 - 1)

器種：爛德利

J B - 5 - a



(御殿 678)

器種：鉢
高台面が幅広「U」字状, いわゆる初期伊万里

J B - 5 - b



(中診 E34 - 1)

器種：鉢

高台断面がシャープな「U」字状

J B - 5 - c



(中診 J31 - 1)

器種：鉢

高台内蛇ノ目釉剥ぎ, 青磁に多い

J B - 5 - d

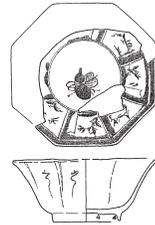


(御殿 1)

器種：鉢

蛇ノ目凹形高台

J B - 5 - e



介

(中診 2号組石)

器種：鉢

慣用名一八角鉢

J B - 5 - f

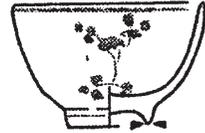


(御殿 678)

器種：鉢

高台断面三角形

J B - 6 - a

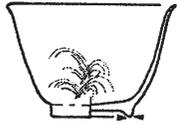


(中診 F34 - 11)

器種：坏

丸碗形

J B - 6 - b



(中診 F34 - 11)

器種：坏
端反形

J B - 6 - c



(中診 H21 - 1)

器種：坏
極めて薄手

J B - 6 - d



(中診 G20 - 2)

器種：坏
腰折れ直立形

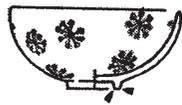
J B - 6 - e



(工 14 SK293)

器種：坏
型作り，慣用名一紅皿

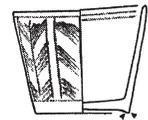
J B - 6 - f



(中診 H21 - 1)

器種：坏
高台径が小さい半球形の薄手坏

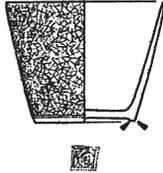
J B - 7 - a



(設備 X36 - 1)

器種：猪口
底部蛇ノ目凹形高台状

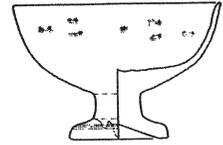
J B - 7 - b



(中診 遺構外)

器種：猪口
底部輪高台状

J B - 8 - a



(御殿 255a)

器種：仏飯器
脚部のえぐりが深い

J B - 8 - b



(中診 D33 - 1)

器種：仏飯器
脚部のえぐりが浅い

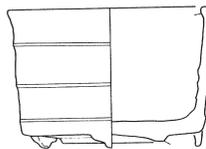
J B - 8 - c



(中診 H21 - 1)

器種：仏飯器
脚部のえぐりが浅く、畳付外周面取り

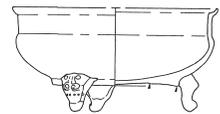
J B - 9 - a



(理 1号井戸)

器種：香炉・火入れ
円盤状の露胎部

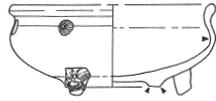
J B - 9 - b



(中診 H32 - 5)

器種：香炉・火入れ
蛇ノ目状の露胎部

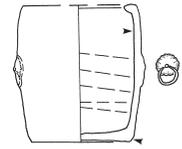
J B - 9 - c



(中診 L34 - 2)

器種：香炉・火入れ
高台状の露胎部

J B - 9 - d



(工 14 SU327 上)

器種：香炉・火入れ
べた底

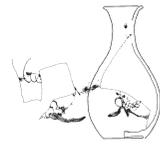
J B - 10 - a



(御殿 焼土溜まり)

器種：瓶
大型長頸瓶

J B - 10 - e



(御殿 802)

器種：瓶
いわゆる初期伊万里，口縁部が朝顔形に開く

J B - 11 - a



(工 14 SK03)

器種：御神酒徳利
瓶子形

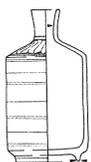
J B - 11 - b



(工 14 SU396)

器種：御神酒徳利
鶴首形

J B - 11 - c



(中診 K30 - 1)

器種：御神酒德利
筒形

J B - 12



(中診 F34 - 11)

器種：油壺

J B - 13 - a



(工 14 SK200)

器種：蓋物
丸碗形

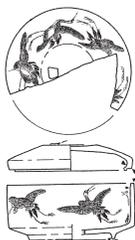
J B - 13 - b



(御殿 537)

器種：蓋物
筒形

J B - 13 - c



(中診 H21 - 2)

器種：蓋物
段重

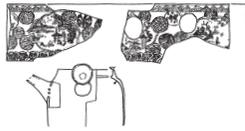
J B - 15



(御殿 537)

器種：壺・甕

J B - 16



(給水 AL37 - 1)

器種：急須

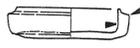
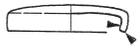
J B - 18 - a



(中診 F34 - 11)

器種：合子
扁平な球形

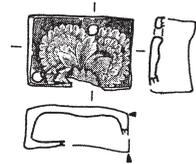
J B - 18 - b



(外来 SK81)

器種：合子
筒形

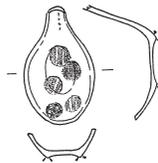
J B - 19



(中診 H21 - 1)

器種：水滴

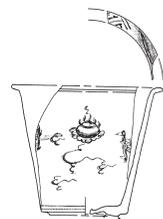
J B - 20



(給水 AL37 - 1)

器種：蓮華

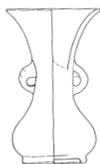
J B - 21



(工 14 SK299)

器種：植木鉢

J B - 22



(御殿 537)

器種：花生

J B - 24



(給水 AJ33 - 1)

器種：灰落し

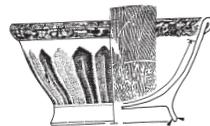
J B - 27 - a



(外来 SE100)

器種：水注
銚子形，釣手

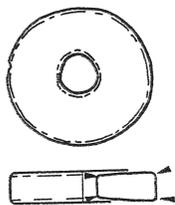
J B - 29



(外来 SK81)

器種：搦鉢

J B - 35



(外来 SU01)

器種：戸車

J B - 60



(御殿 534 ほか)

器種：人形

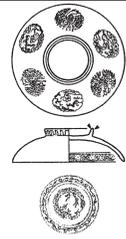
J B - 61



(御殿 464 ほか)

器種：ミニチュア

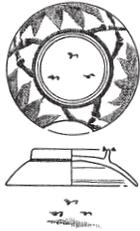
J B - 00 - a



(中診 H21 - 2)

器種：蓋
JB - 1 - e の蓋, 丸碗

J B - 00 - b



(中診 2号組石)

器種：蓋
JB - 1 - m の蓋, 広東碗

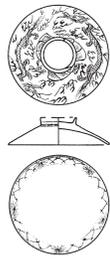
J B - 00 - c



(中診 H21 - 1)

器種：蓋
JB - 1 - n の蓋, 端反形碗

J B - 00 - d



(外来 SK81)

器種：蓋
JB - 1 - p の蓋, 直線的に開く薄手の碗

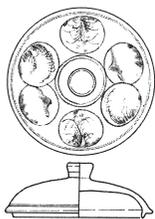
J B - 00 - e



(中診 2号組石)

器種：蓋
JB - 1 - q の蓋, 「ハ」の字状高台の碗

J B - 00 - f



(御殿 537)

器種：蓋

JB - 13 の蓋, 蓋物

J B - 00 - g

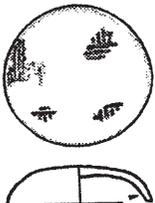


(御殿 537)

器種：蓋

JB - 15 の蓋, 壺・甕

J B - 00 - i



(中診 G20 - 2)

器種：蓋

JB - 18 - a の蓋, 合子

J B - 00 - j



(給水 AJ34 - 1)

器種：蓋

JB - 1 - r の蓋, 朝顔形

J B - 00 - k

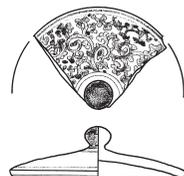


(御殿 537)

器種：蓋

JB - 1 - d の蓋, 高台高の高い大振りの碗

J B - 00 - m

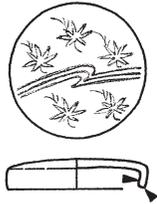


(病棟 C 2 層)

器種：蓋

JB - 27 - a の蓋, 銚子

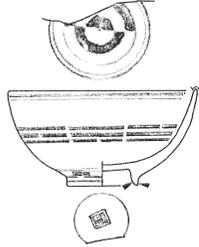
J B - 00 - n



(外来 SK81)

器種：蓋
JB-18-b の蓋，合子

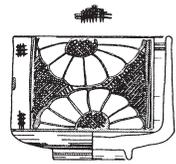
J C - 1 - a



(I 14 SK66)

器種：碗
丸碗，蓋付有

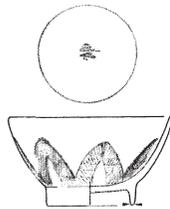
J C - 1 - b



(経塚山西)

器種：碗
筒形碗

J C - 1 - c



(給水 AJ34 - 2)

器種：碗
蓋付有，慣用名一広東碗

J C - 1 - d



(中診 H21 - 2)

器種：碗
端反形碗，蓋付有

J C - 1 - e

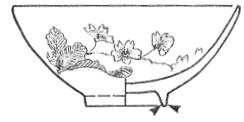


(中診 2号組石)

器種：碗

腰が張り、体部が直立する小振りの碗、
慣用名一湯呑碗

J C - 1 - f



(工 14 SU392)

器種：碗

高台から直線的に開く薄手の碗、蓋付有

J C - 2 - a



(設備 AE36 - 3)

器種：皿

蛇ノ目凹形高台

J C - 2 - b



(工 14 SK358)

器種：皿

輪高台

J C - 2 - c

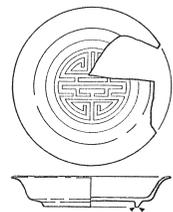


(給水 AL37 - 1)

器種：皿

蛇ノ目高台

J C - 2 - d



(給水 AL37 - 1)

器種：皿

そり皿、木型打込など

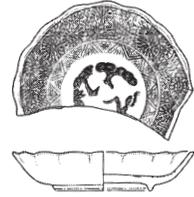
J C - 2 - e



(工 14 SU140)

器種：皿
陽刻

J C - 2 - f



(巢鴨 I 16)

器種：皿
陰刻

J C - 4



(御殿 7)

器種：爛德利

J C - 5



(工 14 SK358)

器種：鉢

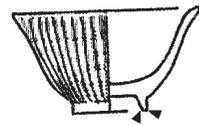
J C - 6 - a



(中診 H21 - 8)

器種：坏
丸碗形

J C - 6 - b



(給水 AJ35 - 1)

器種：坏
端反形

J C - 6 - c



(御殿 7)

器種：坏
筒形

J C - 6 - d



(中診 2号組石)

器種：坏
極めて薄手

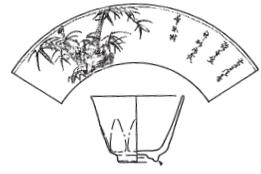
J C - 6 - e



(給水 AL37 - 1)

器種：坏
寿文坏

J C - 6 - f



(給水 AL37 - 1)

器種：坏
体部が直線的に開く

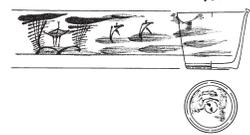
J C - 6 - g



(工 14 SK358)

器種：坏
型作り，慣用名一紅皿

J C - 7



(工 14 SK359)

器種：猪口

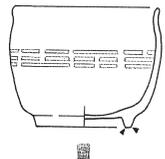
J C - 8



(工 14 SU396)

器種：仏飯器

J C - 9



(設備 AE36 - 3)

器種：香炉・火入れ

J C - 11 - a



(工 14 SU372)

器種：御神酒德利
瓶子形

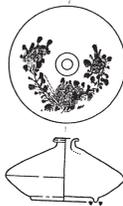
J C - 11 - b



(中診 H21 - 2)

器種：御神酒德利
鶴首形

J C - 12



(中診 2号組石)

器種：油壺

J C - 13



(御殿 7)

器種：蓋物

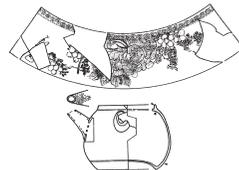
J C - 15



(中診 2号組石)

器種：壺・甕

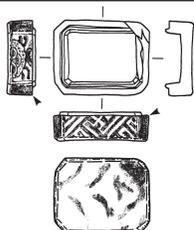
J C - 16



(給水 AL37 - 1)

器種：急須

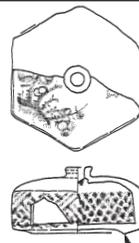
J C - 18



(工 14 SK292)

器種：合子

J C - 19



(外来 SK81)

器種：水滴

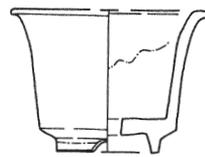
J C - 20



(給水 AL37 - 1)

器種：蓮華

J C - 21



(設備 AD35 - 1)

器種：植木鉢

J C - 22



(工 14 遺構外)

器種：花生

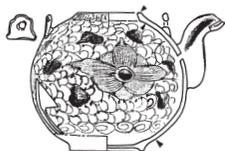
J C - 27



(工 14 SK260)

器種：水注

J C - 34



(工 14 SU02)

器種：土瓶

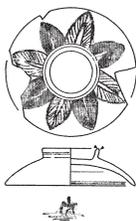
J C - 61



(御殿 SK07)

器種：ミニチュア

J C - 00 - a

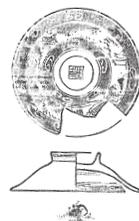


(給水 AJ35 - 1)

器種：蓋

JC - 1 - c の蓋, 広東碗

J C - 00 - b



(給水 AJ35 - 1)

器種：蓋

JC - 1 - d の蓋, 端反形碗

J C - 00 - c



(工 14 SU392)

器種：蓋

J C - 1 - f の蓋, 直線的に開く碗

J C - 00 - d

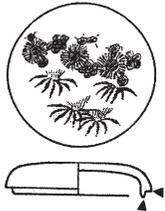


(構内試掘)

器種：蓋

J C - 13 の蓋, 蓋物

J C - 00 - f



(設備 AE36 - 3)

器種：蓋

J C - 18 の蓋, 合子

J C - 00 - g

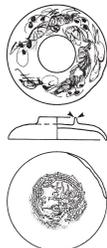


(給水 AL37 - 1)

特徴：蓋

J C - 16 の蓋, 急須

J C - 00 - i



(工 14 遺構外)

器種：蓋

J C - 1 - a の蓋, 丸碗

JN-1



(左は御殿 49, 右は中診 F33-3)

器種：碗

JN-2



(左は中診 F27-1, 右は7号組石)

器種：皿

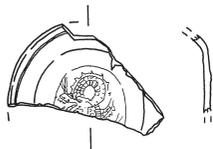
JN-6



(中診 遺構外)

器種：坏

JP-2



(I.14 SK03)

器種：皿

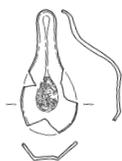
JP-6



(I.14 SK358)

器種：坏

J P - 20



(給水 AL37 - 1)

器種：蓮華

TA 5 (宜興窯系)



(蓋) 中診 F34 - 11, (身) 工 14 SK358

TA 6 (朝鮮)



2 段目左は御殿 802, それ以外は看宿 SK299

TA7 (ベトナム)



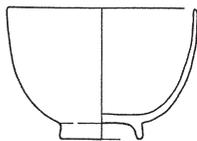
左は看宿 SK299, 右は法 E8 - 2号

TA8 (ヨーロッパ)



1 段目左は看宿 SK299, 右は御殿 5
2 段目は工 14 SK292

TB-1-a

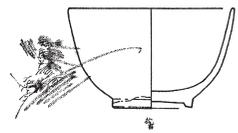


(中診 F34 - 11)

器種：碗

大振りの丸碗, 慣用名一呉器手

TB-1-b

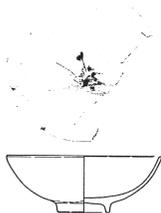


(中診 F34 - 11)

器種：碗

外面主文様, 慣用名一京焼風陶器

T B - 1 - c

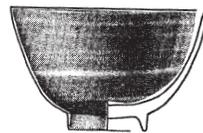


(法 F7 - 6号土坑)

器種：碗

内面主文様，慣用名一京焼風陶器

T B - 1 - d

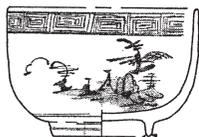


(中診 K30 - 1)

器種：碗

刷毛目丸碗，渦巻状の刷毛目

T B - 1 - f

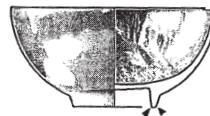


(中診 F33 - 3)

器種：碗

陶胎染付

T B - 1 - g



(中診 1号組石)

器種：碗

刷毛目丸碗，打・波状・鋸齒状の刷毛目

T B - 1 - h

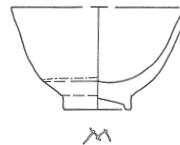


(設備 AD37 - 1)

器種：碗

刷毛目端反形碗

T B - 1 - i



(工 14 SK383)

器種：碗

青緑釉丸碗，内野山窯指標

T B - 2 - a



(中診 B25 - 1)

器種：皿

青緑釉輪剥皿，内野山窯指標

T B - 2 - b

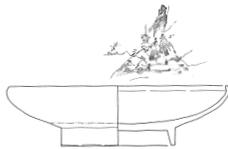


(中診 J21 - 1)

器種：皿

灰釉砂目皿

T B - 2 - c

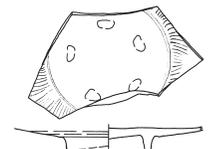


(御殿 391)

器種：皿

慣用名一京焼風陶器

T B - 2 - d



(病棟 SK2256)

器種：皿

透明釉砂目皿，内野山窯指標

T B - 2 - e



(御殿 264)

器種：皿

胎土目皿

T B - 2 - f

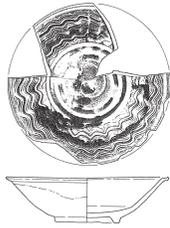


(理 6号地下式土坑)

器種：皿

陶胎染付

T B - 5 - a



(中診 F34 - 11)

器種：鉢
刷毛目鉢

T B - 5 - b



(中診 L30 - 1)

特徴：鉢
三島手鉢

T B - 5 - c



(中診 E34 - 2)

器種：鉢
慣用名一京焼風陶器

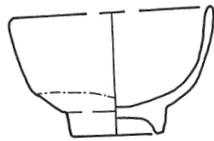
T B - 5 - d



(中診 C28 - 1・2)

器種：鉢
輪剥鉢，内野山窯指標

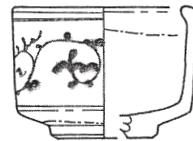
T B - 6



(工 14 SE174)

器種：坏

T B - 9 - a



(中診 D28 - 1)

器種：香炉・火入れ
陶胎染付

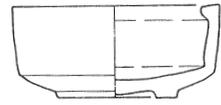
T B - 9 - b



(設備 X35 - 9)

器種：香炉・火入れ
慣用名一京焼風陶器

T B - 9 - c



(三栄町 A区第1号遺構)

器種：香炉・火入れ
刷毛目

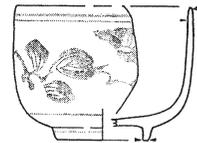
T B - 10



(内野山北)

器種：瓶

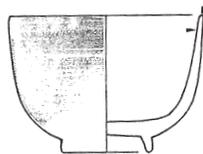
T B - 13 - a



(中診 G20 - 2)

器種：蓋物
陶胎染付

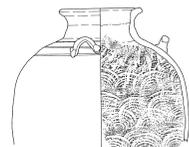
T B - 13 - b



(設備 Y34 - 5)

器種：蓋物
刷毛目

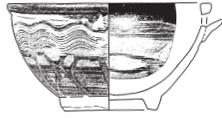
T B - 15



(御殿 532)

器種：壺・甕

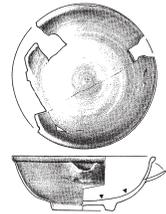
T B - 23 - a



(工 14 SK383)

器種：片口鉢
深いタイプ，刷毛目，底部鉄釉

T B - 23 - b



(設備 Z35 - 4)

器種：片口鉢
浅いタイプ，刷毛目，蛇ノ目釉剥ぎ

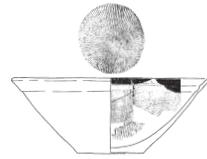
T B - 29 - a



(工 14 SU18)

器種：搦鉢
内外面全釉

T B - 29 - b



(中診 遺構外)

器種：搦鉢
口縁部のみ施釉

T B - 00 - a



(中診 F33 - 3)

器種：蓋
TB - 13 - b の蓋，蓋物

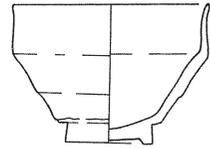
TC-1-a



(御殿 618)

器種：碗
天目碗

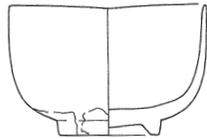
TC-1-b



(中診 K23-1)

器種：碗
白天目

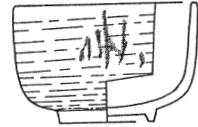
TC-1-c



(中診 Y37-3)

器種：碗
灰釉薄掛け丸碗

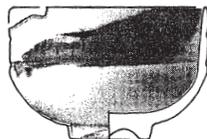
TC-1-d



(中診 F33-3)

器種：碗
灰釉に簡略な山水の呉須絵，慣用名一御室碗

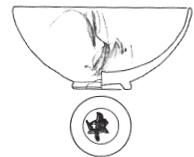
TC-1-f



(設備 Y37-4)

器種：碗
腰が張る二段の段を有する碗，渦巻高台，
灰釉鉄釉流し

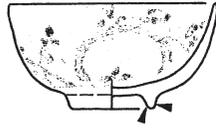
TC-1-g



(御殿 遺構外)

器種：碗
灰釉，「ハ」の字状に開く，柳文の鉄絵
が多い

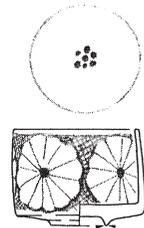
TC-1-h



(外来 SK22)

器種：碗
丸碗，太白手

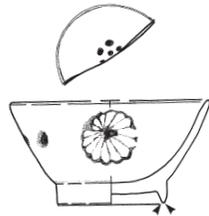
TC-1-i



(給水 AJ34-2)

器種：碗
筒形碗，太白手

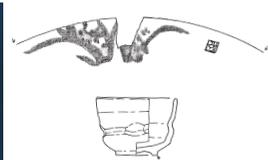
TC-1-j



(工1 SK01)

器種：碗
慣用名一広東碗，太白手

TC-1-k



(中診 F33-3)

器種：碗
体部中位に大きな凹み有，灰釉

TC-1-l



(設備 X37-6)

器種：碗
半筒形碗，慣用名一せんじ

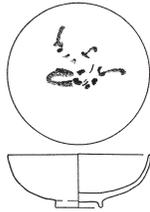
TC-1-m



(設備 Y34-4)

器種：碗
半球形の小振りの碗，笹文など多い，京焼風

TC-1-n

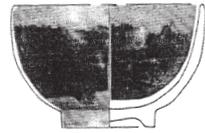


(中診 E22-1)

器種：碗

平碗，見込みに文様，京焼風

TC-1-o

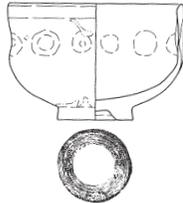


(外来 SU286)

器種：碗

慣用名一尾呂茶碗

TC-1-p

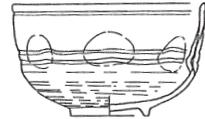


(御殿 245)

器種：碗

漆黒釉に長石釉散らし，慣用名一拳骨茶碗

TC-1-q

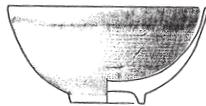


(給水 AJ35-1)

器種：碗

錆釉斑状，横位や波状の沈線が多い

TC-1-r

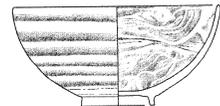


(設備 X37-4)

器種：碗

トビガンナ状の押形文，掛分け，慣用名一鎧茶碗

TC-1-s

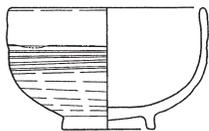


(御殿 223)

器種：碗

刷毛目

TC-1-u

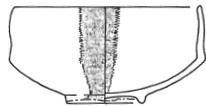


(御殿 233)

器種：碗

内面・外面上半灰釉，外面下半錆釉，慣用名一腰錆碗

TC-1-v



(外来 SK174)

器種：碗

半筒形碗，灰釉柿釉掛分け

TC-1-w



(工 14 SU176)

器種：碗

杉形碗，若松文，慣用名一小杉茶碗

TC-1-x

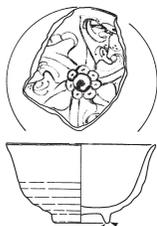


(理 13号地下式土坑)

器種：碗

緑釉丸碗

TC-1-y

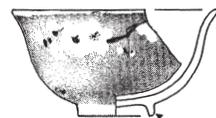


(工 SK01)

器種：碗

口緑部端反，蓋付有，白化粧に鉄絵など，慣用名一奈良茶碗

TC-1-z



(中診 H21-2)

器種：碗

端反形碗，内面白化粧，折枝梅花文

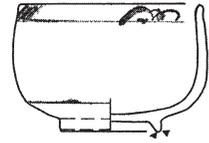
TC-1-aa



(中診 K24-1)

器種：碗
灰釉丸碗

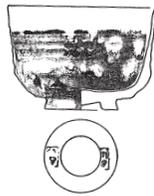
TC-1-ab



(中診 2号組石)

器種：碗
慣用名一小丸碗，太白手

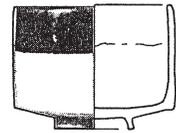
TC-1-ac



(中診 G20-2)

器種：碗
灰釉錆釉掛分け，長石釉散らし，体部に凹み有

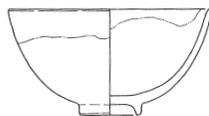
TC-1-ad



(設備 Y34-4)

器種：碗
筒形碗，漆黒釉錆釉掛分け

JB-1-ae



(御殿 233)

器種：碗
体部灰釉，口緑部緑釉・瑠璃釉などの掛分け

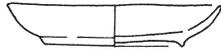
TC-1-af



(理 12号土坑)

器種：碗
折枝梅花文，慣用名一広東碗

TC-2-a

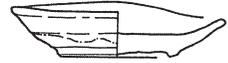


(中診 L22 - 1・L23 - 1)

器種：皿

灰釉丸皿，ピン痕有

TC-2-b



(中診 12号組石)

器種：皿

灰釉丸皿，輪状直重ね痕有

TC-2-c

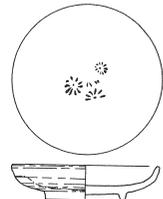


(御殿 618)

特徴：皿

長石釉丸皿

TC-2-e



(中診 F33 - 3)

器種：皿

灰釉摺絵皿，慣用名一御深井

TC-2-f



(工 14 SK175)

器種：皿

幅広高台，鉄・呉須による絵付，慣用名一石皿

TC-2-g

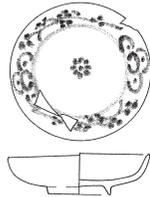


(中診 2号組石)

器種：皿

見込み外周に鉄絵による扁平な渦巻文，慣用名一馬ノ目皿

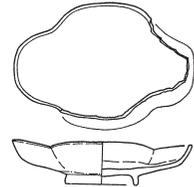
TC-2-h



(設備 Y37-4)

器種：皿
輪高台，慣用名一太白手

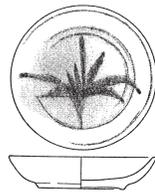
TC-2-i



(設備 AD37-1)

器種：皿
輪高台型皿，灰釉

TC-2-j



(中診 H20-4)

器種：皿
鉄絵蘭竹文，小振り

TC-2-k



(中診 F34-11)

器種：皿
菊皿，外面しのぎ有，黄瀬戸釉緑釉流し

TC-2-l



(中診 F34-11)

器種：皿
菊皿，外面しのぎ無，黄瀬戸釉緑釉流し

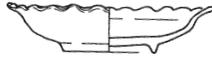
TC-2-m



(御殿 270)

器種：皿
輪禿皿，小振り

TC-2-n



(設備 Z37-1)

器種：皿
鏝折れヒダ皿，灰釉

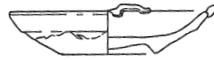
TC-2-o



(法 E8-4号)

器種：皿
柿釉，灯明皿，小振り

TC-2-p



(中診 2号組石)

器種：皿
把手付灯明皿

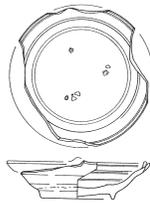
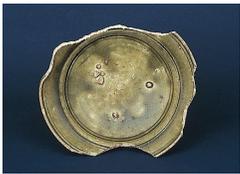
TC-2-q



(御殿 7)

器種：皿
灰釉丸皿，高台無

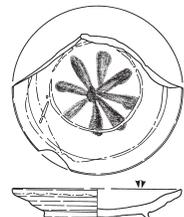
TC-2-r



(薬新 SE67)

器種：皿
総織部

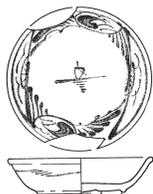
TC-2-s



(薬新 盛土)

器種：皿
志野織部，菊花文など

TC-2-t



(中診 F23-2)

器種：皿

蛇ノ目凹形高台，太白手

TC-4



(中診 2号組石)

器種：爛徳利

TC-5-a



(中診 遺構外)

器種：鉢

笠原鉢，鉄絵，緑釉流し，口縁部外反

TC-5-c



(設備 AD35-2)

器種：鉢

輪禿鉢，灰釉，口唇部外削ぎ状

TC-5-f

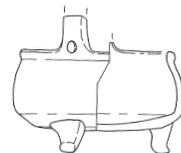


(理 74号井戸)

器種：鉢

水盤，灰釉，碁笥底，口縁部一箇所凹み

TC-5-h

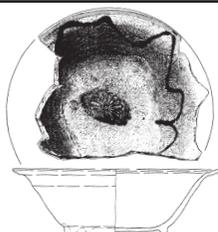


(中診 H20-7・9)

器種：鉢

手鉢

TC-5-i

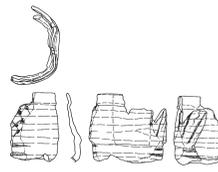


(外来 SU29)

器種：鉢

灰釉緑釉流し，中央印花，外周波状の櫛描文

TC-5-k



(葉資 SK08・10)

器種：鉢

織部

TC-5-l

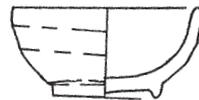


(御殿 遺構外)

器種：鉢

こね鉢

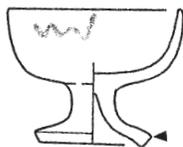
TC-6



(中診 D32-1)

器種：坏

TC-8



(中診 L34-1)

器種：仏飯器

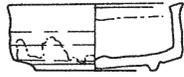
TC-9-a



(法 D7-4号土抗)

器種：香炉・火入れ
灰釉

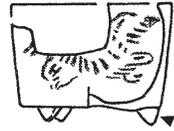
TC-9-b



(中診 C28-1・2)

器種：香炉・火入れ
鉄釉

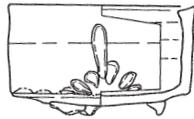
TC-9-c



(中診 1号組石)

器種：香炉・火入れ
灰釉，摺絵，慣用名—御深井

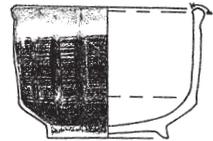
TC-9-d



(中診 C28-4・5)

器種：香炉・火入れ
褐釉，半菊状のしのぎ

TC-9-e



(中診 D32-1)

器種：香炉・火付け
鉄釉灰釉掛分け，横位の沈線に縦位のしのぎ

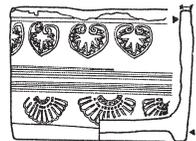
TC-9-f



(御殿 532)

器種：香炉・火入れ
袴腰，鉄釉輪高台

TC-9-g



(中診 2号組石)

特徴：香炉・火入れ
筒形

TC-10-a



(左は中診 C28-4・5, 右はE34-1)

器種：瓶

二合半灰釉徳利, 底部釉拭取り

TC-10-c



(設備 X35-4)

器種：瓶

二合半灰釉徳利, つけ掛け

TC-10-d



(左から中診 F34-11, F33-3, H21-2)

特徴：瓶

五合徳利

TC-10-e

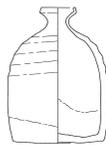


(中診 F23-2)

器種：瓶

一升徳利

TC-10-f

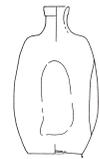


(中診 F34-11)

器種：瓶

舟徳利, 漆黒釉または柿釉

TC-10-g

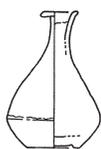


(中診 F23-2)

器種：瓶

柿釉徳利, 献上備前写し

TC-10-h



(中診 F34-11)

器種：瓶
らつきょう形

TC-10-k



(葉新 SE67)

器種：瓶
織部徳利

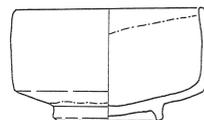
TC-12



(設備 AE36-4)

器種：油壺

TC-13



(工 14 SK39)

器種：蓋物

TC-15-a



(御殿 1)

器種：壺・甕
柿釉，底部及び器面下端露胎，平縁，慣
用名一赤津半胴・銭甕

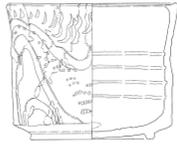
TC-15-b



(中診 H21-1)

器種：壺・甕
柿釉灰釉流し，底部及び器面下端露胎，
口縁部外反

TC-15-c



(工14 SU307)

器種：壺・甕

水甕，灰釉に鉄釉や緑釉を流す，流水状の文様，斑状の刺突

TC-15-d

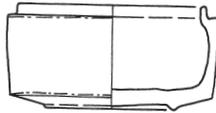


(中診 2号組石)

器種：壺・甕

緑釉，貼付文

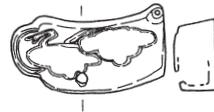
TC-18



(工1 SK01)

器種：合子

TC-19



(設備 AD34-2)

器種：水滴

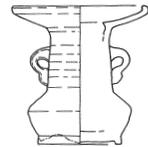
TC-21



(中診 7号組石)

器種：植木鉢

TC-22-a



(中診 C28-1・2)

器種：花生
盤口形

TC-22-b



(中診 E22-1)

器種：花生
朝顔形

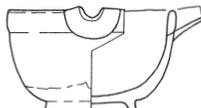
TC-23-a



(御殿 225a)

器種：片口鉢
筒形

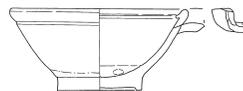
TC-23-b



(設備 Y37-3)

器種：片口鉢
丸碗形

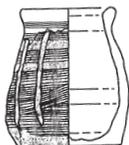
TC-23-c



(工1 SK01)

器種：片口鉢
「ハ」の字状に開く

TC-24-a



(外来 SK290)

器種：灰落し
鉄釉灰釉掛分け，横位の沈線に縦位のし
のぎ

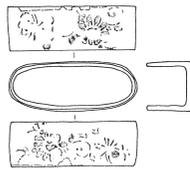
TC-24-b



(工14 SU357)

器種：灰落し
長筒形

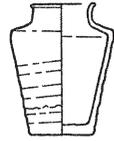
TC-25



(外来 SU313)

器種：鬢水入れ

TC-26



(中診 F34-11)

器種：茶入れ

TC-27-a

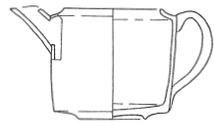


(設備 X35-9)

器種：水注

褐釉，底部露胎，らっきょう形，橋状の
取手

TC-27-b



(給水 AJ34-2)

器種：水注

円筒形の体部に注口，取手，蓋付，慣用
名一汁次

TC-27-c

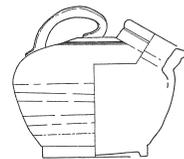


(給水 AJ33-1)

器種：水注

灰釉，摺絵，慣用名一御深井

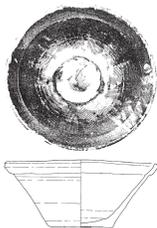
TC-28



(中診 D33-1)

器種：澆瓶

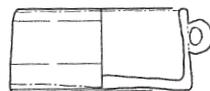
TC-29



(中診 C26-1)

器種：播鉢

TC-30



(御殿 49)

器種：餌入れ

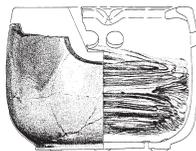
TC-31-a



(工 14 SK298)

器種：瓶掛

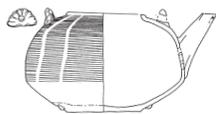
TC-31-b



(外来 SK380)

器種：風炉

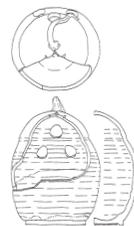
TC-34



(工 14 SU396)

器種：土瓶

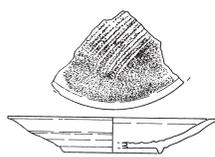
TC-38



(外来 SU214)

器種：手焙り

TC-39



(内藤町 C216)

器種：おろし皿

TC-40-b



(構内試堀)

器種：油受け皿
脚付，灰釉

TC-40-c



(中診 2号組石)

器種：油受け皿
脚無，錆釉

TC-40-d



(御殿 7)

器種：油受け皿
脚無，灰釉

TC-40-e



(給水 AJ34-1)

器種：油受け皿
高い受付

TC-41

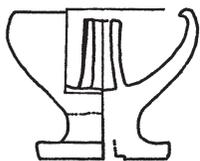


(工 14 SU389)

器種：油徳利

TC

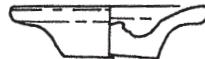
TC-44-a



(外来 SK81)

器種：ひょうそく
脚付

TC-00-a



(中診 F33-3)

器種：蓋
TC-15の蓋，釘状つまみ，壺・甕

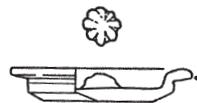
TC-00-b



(中診 F33-3)

器種：蓋
TC-15の蓋，橋状つまみ，壺・甕

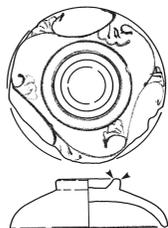
TC-00-c



(給水 AJ35-1)

特徴：蓋
TC-27-bの蓋，釘状つまみ，汁次

TC-00-d



(工1 SK01)

器種：蓋
TC-1-yの蓋，輪高台，奈良茶碗

TC-00-e



(中診 F33-3)

器種：蓋
TC-27の蓋，水注

TC-00-f

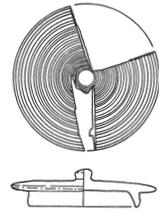


(工1 SK01)

器種：蓋

TC-18の蓋，合子

TC-00-g

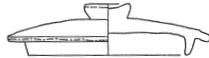


(工14 SU396)

器種：蓋

TC-34の蓋，土瓶

TC-00-h



(工14 SK39)

器種：蓋

TC-13の蓋，蓋物

TD-1-b



(中診 C29-3)

器種：碗

高台径が小さい半球形の碗，薄手

TD-1-c

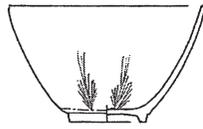


(中診 D33-1)

器種：碗

高台径が大きい碗

TD-1-d



(中診 E34-1)

器種：碗

杉形碗，鉄または呉須で若杉文，慣用名
一小杉茶碗

TD-1-e

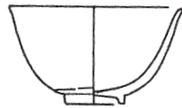


(給水 AJ33-1)

器種：碗

端反形，口縁部緑釉，体部灰釉の掛分け

TD-1-g



(中診 2号組石)

器種：碗

端反形，小振りで器面には細かい貫入

TD-1-h

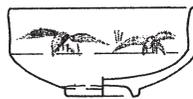


(文 U4-3号)

器種：碗

平碗，多くは見込みに銹絵染付

TD-1-i



(設備 X36-5)

器種：碗

半筒形

TD-1-j

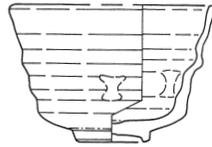


(中診 G26-1)

器種：碗

筒形，多くは鉄絵で文様

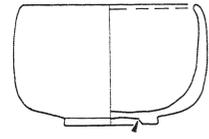
TD-1-k



(工 14 SU360)

器種：碗
体部中位に大きな凹み有，灰釉

TD-1-l



(外来 SK18)

器種：碗
楽

TD-1-m



(工 14 SK330)

器種：碗
腰が張る碗

TD-2-a



(中診 2号組石)

器種：皿
見込み櫛目有，灯明皿，多くは三箇所
のピン痕

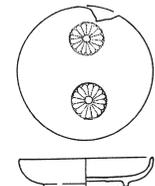
TD-2-b



(中診 2号組石)

器種：皿
見込み櫛目無，灯明皿，多くは三箇所
のピン痕

TD-2-c



(給水 AL37-1)

器種：皿
輪高台

TD-4



(中診 遺構外)

器種：爛徳利

TD-5



(御殿 678)

器種：鉢

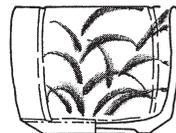
TD-6



(中診 G26 - 1)

器種：坏

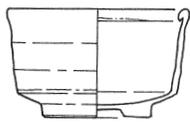
TD-9-a



(中診 D28 - 1)

器種：香炉・火入れ
型作り

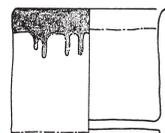
TD-9-b



(中診 F34 - 11)

器種：香炉・火入れ
蛇ノ目高台, 灰釉, 体部に強いロクロ目,
口縁部内折

TD-9-c



(外来 SK81)

器種：香炉・火入れ
筒形

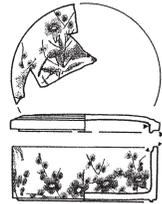
TD-13-a



(中診 D34-2)

器種：蓋物
丸碗形の身

TD-13-b



(中診 E27-1)

器種：蓋物
段重

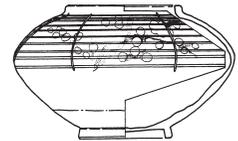
TD-13-c



(給水 AJ38-3)

器種：蓋物
半筒形の身

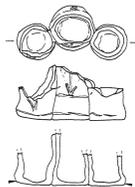
TD-13-d



(工 14 SU295上)

器種：蓋物
格子状のしのぎ、梅花文

TD-14



(外来 SU284)

器種：筆立て

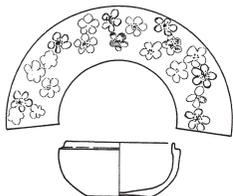
TD-15-a



(御殿 537)

器種：壺・甕
慣用名一腰白茶壺，三耳壺，鉄釉灰釉掛分け

TD-18-a



(外来 SK290)

器種：合子
扁平な球形

TD-18-b



(中診 D32-1)

器種：合子
筒形

TD-19



(御殿 7)

器種：水滴

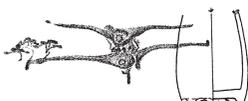
TD-22



(設備 AE34-1)

器種：花生

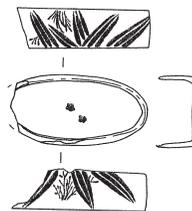
TD-24



(設備 Y36-2)

器種：灰落し

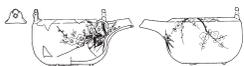
TD-25



(中診 D32-1)

器種：鬢水入れ

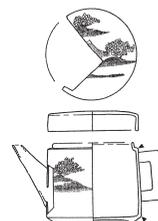
T D - 27 - a



(工 14 SU294)

器種：水注
銚子形，釣手

T D - 27 - d



(中診 2号組石)

器種：水注
筒形

T D - 32



(中診 D32 - 1)

器種：柄杓

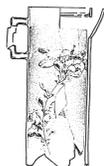
T D - 34



(設備 AE34 - 3)

器種：土瓶

T D - 36 - a



(工 14 SK186)

器種：ちろり
長筒形，横手

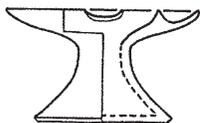
T D - 36 - b



(中診 E23 - 1)

器種：ちろり
段筒形，釣手

TD-40-a



(中診 H23-3)

器種：油受け皿
脚付，灰釉

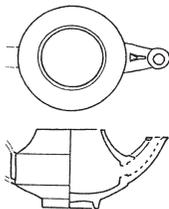
TD-40-b



(中診 2号組石)

器種：油受け皿
脚無，灰釉

TD-46



(給水 AJ37-3)

器種：カンテラ

TD-60



(工 14 SU357)

器種：人形

TD-61



(工 14 SU176 ほか)

器種：ミニチュア

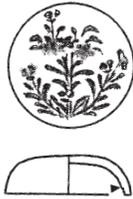
TD-00-a



(給水 AJ38-3)

器種：蓋
TD-13の蓋，蓋物

TD-00-b



(中診 D33-1)

器種：蓋

TD-18-aの蓋，ドーム形，合子

TD-00-c



(中診 2号組石)

器種：蓋

TD-27-dの蓋，筒形，水注

TD-00-f

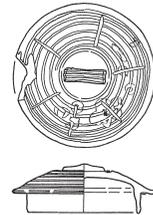


(工14 SK186)

器種：蓋

TD-36-bの蓋，長筒形，ちろり

TD-00-h



(工14 SU295上)

器種：蓋

TD-13-dの蓋，格子状しのぎ，蓋物

TD-00-i



(中診 D32-1)

器種：蓋

TD-18-bの蓋，筒形，合子

TD-00-j

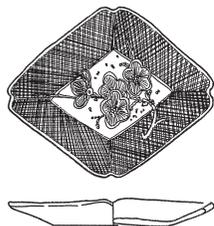


(給水 AJ37-3)

器種：蓋

TD-13-bの蓋，段重

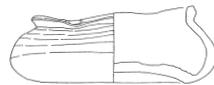
TE-2



(工 14 SU396)

器種：皿

TE-5



(丸の内三丁目 52号)

器種：鉢

TE-10-a

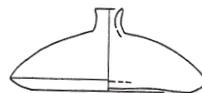


(御殿 271)

器種：瓶

献上手，薄作り，鶴首

TE-12



(中診 F33-3)

器種：油壺

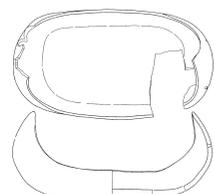
TE-15



(御殿 678)

器種：壺・甕

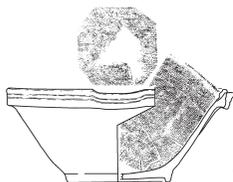
TE-22



(法 E8-2号土坑)

器種：花生

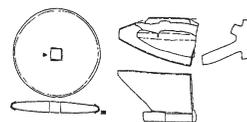
TE - 29



(家畜 SK09)

器種：播鉢

TE - 37



(右は 中診 F34 - 11, 左は F27 - 1)

器種：薬研

TE - 40



(工 14 SU382)

器種：油受け皿

TE - 41



(外来 SU279)

器種：油徳利

TE - 61

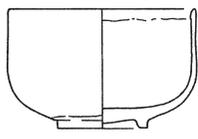


(工 14 SK330)

器種：ミニチュア

T
その他

TF-1



(設備 W46-1)

器種：碗

TF-2



(中診 C26-2)

器種：皿

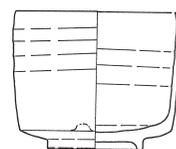
TF-10



(御殿 537)

器種：瓶

TF-13



(工 14 SU18)

器種：蓋物

TF-15



(中診 F34-11)

器種：壺・甕

TF-29



(御殿 532)

器種：搦鉢

TF - 40



(中診 2号組石)

器種：油受け皿

TF - 00



(工 14 SU18)

器種：蓋

TG - 15



(病棟 講安寺)

器種：壺・甕

TH - 1 - a



(給水 AJ35 - 1)

器種：碗

藁灰釉開口碗，渦巻高台

TH - 1 - b



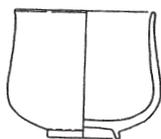
(中診 2号組石)

器種：碗

ピラ掛け，渦巻高台

T
その他

TI - 1



(本郷追分 11号地下式坑)

器種：碗

TI - 16



(御殿 7)

器種：急須

TI - 34



(中診 遺構外)

器種：土瓶

TI - 00

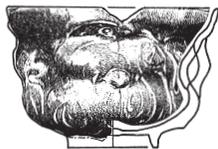


(御殿 7)

器種：蓋

TI - 16, 34 の蓋, 急須, 土瓶

TJ - 1



(工 14 SK101)

器種：碗

TJ - 6



(工 14 SK101)

器種：坏

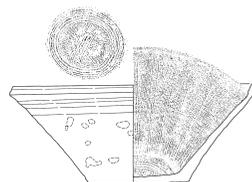
T K - 15



(御殿 532)

器種：壺・甕

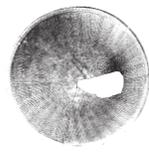
T K - 29



(御殿 618)

器種：搦鉢

T L - 29



(中診 B25 - 1)

器種：搦鉢

T M - 29

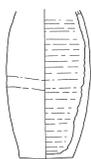


(工 14 SK358)

器種：搦鉢

T
その他

TO-10



(中診 7号組石)

器種：瓶

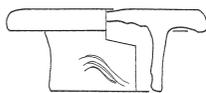
TO-15



(壺屋)

器種：壺・甕

TO-00



(外来 SK152)

器種：蓋

TO-15の蓋, 壺・甕

TZ-16



(上は工14 SK03, 右下はSK292・296, 左下は中診 H21 - 1)

器種：急須

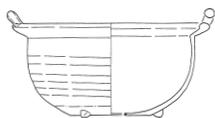
TZ-17



(外来 SU34)

器種：爛鍋

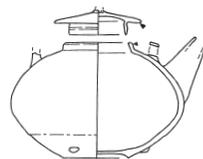
T Z - 33 - a



(工 14 SK330)

器種：鍋
紐状把手貼付，柿釉

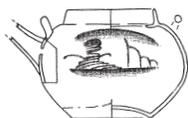
T Z - 34 - a



(中診 H21 - 1)

器種：土瓶
青緑釉，青土瓶

T Z - 34 - b



(給水 AK38 - 1)

器種：土瓶
白土染付

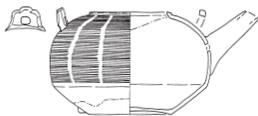
T Z - 34 - c



(工 14 SU327 上)

器種：土瓶
三彩

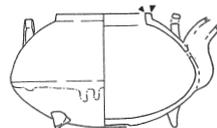
T Z - 34 - d



(工 14 SU392)

器種：土瓶
糸目

T Z - 34 - e



(中診 E34 - 1)

器種：土瓶
鉄釉

T
その他

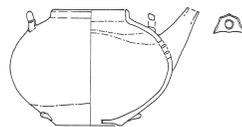
T Z - 34 - f



(外来 SK81)

器種：土瓶
鮫釉

T Z - 34 - g



(工 14 SU295 上)

器種：土瓶
灰釉

T Z - 34 - h



(設備 X36 - 1)

器種：土瓶
染付

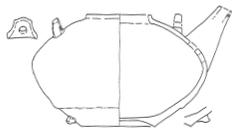
T Z - 34 - i



(工 14 SU02)

器種：土瓶
イッチン

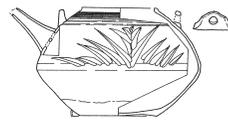
T Z - 34 - k



(工 14 SU402)

器種：土瓶
うのふ釉, やや紫色に発色する

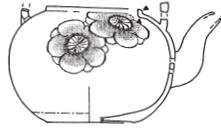
T Z - 34 - l



(設備 AE34 - 3)

器種：土瓶
しのぎ, 鉄釉

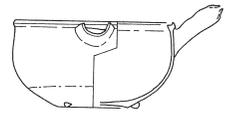
T Z - 34 - m



(設備 AD35 - 2)

器種：土瓶
S字状注口，銹絵染付

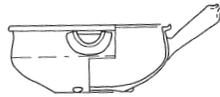
T Z - 42 - a



(中診 H21 - 2)

器種：行平鍋
灰釉

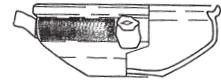
T Z - 42 - b



(中診 H21 - 1)

器種：行平鍋
鉄釉

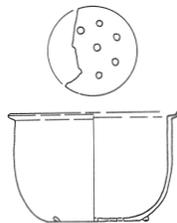
T Z - 42 - c



(給水 AJ37 - 3)

器種：行平鍋
トビガンナ

T Z - 53



(中診 SK81)

器種：蒸し器

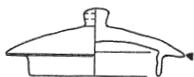
T Z - 61



(工 14 SU385 ほか)

器種：ミニチュア

T Z - 00 - a



(中診 2号組石)

器種：蓋

TZ - 34 - a の蓋, 青緑釉, 青土瓶

T Z - 00 - b

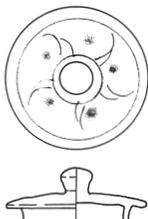


(給水 AL37 - 1)

器種：蓋

TZ - 34 - b の蓋, 白土染付, 土瓶

T Z - 00 - c

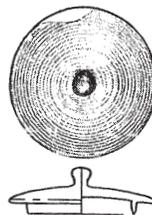


(工 14 SK327上)

器種：蓋

TZ - 34 - c の蓋, 三彩, 土瓶

T Z - 00 - d

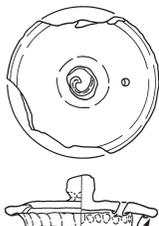


(給水 AL37 - 1)

器種：蓋

TZ - 34 - d の蓋, 糸目, 土瓶

T Z - 00 - e

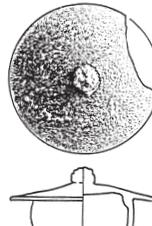


(工 14 SK293)

器種：蓋

TZ - 34 - e の蓋, 鉄釉, 土瓶

T Z - 00 - f

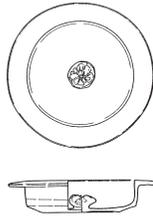


(外来 SK81)

器種：蓋

TZ - 34 - f の蓋, 鮫釉, 土瓶

T Z - 00 - g



(法 E8 - 5号土坑)

器種：蓋

TZ - 34 - g の蓋, 灰釉, 土瓶

T Z - 00 - h

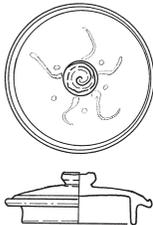


(設備 X36 - 1)

器種：蓋

TZ - 34 - h の 蓋, 染付, 土瓶

T Z - 00 - i



(外来 SK81)

器種：蓋

TZ - 34 - i の蓋, イッチン, 土瓶

T Z - 00 - j



(設備 AE36 - 3)

器種：蓋

TZ - 42 - a の蓋, 灰釉, 行平鍋

T Z - 00 - k

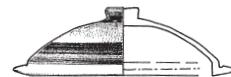


(中診 遺構外)

器種：蓋

TZ - 42 - b の蓋, 鉄釉, 行平鍋

T Z - 00 - l



(中診 C26 - 1)

器種：蓋

TZ - 42 - c の蓋, トビガンナ, 行平鍋

T
その他

T Z - 00 - n

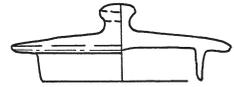


(外来 SU34)

器種：蓋

TZ - 17 の蓋, 爛鍋

T Z - 00 - p

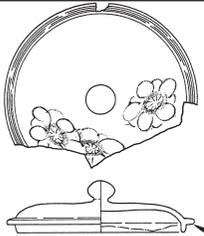


(工 1 SK01)

器種：蓋

TZ - 34 - k の蓋, うのふ釉, 土瓶

T Z - 00 - r

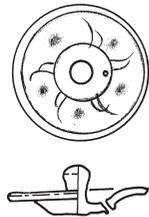


(外来 SK137)

器種：蓋

TZ - 34 - m の蓋, 銹絵染付, 土瓶

T Z - 00 - s

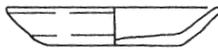


(左は中診 H21 - 8, 右は工 14 SK296)

器種：蓋

TZ - 16 の蓋, 急須

D Z - 2 - a



(葉新 SE67)

器種：皿

右回転

D Z - 2 - b



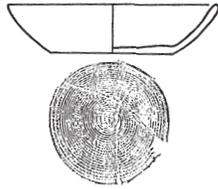
(家畜 SK09)

器種：皿

左回転

DZ

DZ-2-c

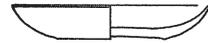


(家畜 SK09)

器種：皿

磨きかわらけ，底部に渦巻状の沈線

DZ-2-d



(中診 H21-1)

器種：皿

磨きかわらけ，底部平滑

DZ-2-e



(中診 H21-2)

器種：皿

耳かわらけ

DZ-2-f



(中診 池)

器種：皿

へそかわらけ

DZ-2-g



(中診 池)

器種：皿

手づくね

DZ-2-h



(家畜 SK02)

器種：皿

透明釉

DZ-2-i



(工 14 SK86・87・88)

器種：皿
底部穿孔

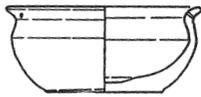
DZ-2-j



(家畜 SK02)

器種：皿
「寿」字の浮文

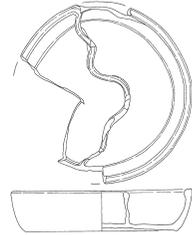
DZ-5-a



(設備 Y37-3)

器種：鉢
土師質，端反

DZ-5-b



(工 14 SK358)

器種：鉢
間仕切有り，箱庭道具

DZ-5-c



(工 14 SK41 ほか)

器種：釜形土製品

DZ-5-d



(家畜 SK09)

器種：鉢
えぐりのあるもの

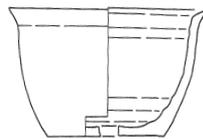
D Z - 16



(工 14 SK02・03)

器種：急須

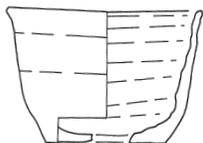
D Z - 21 - a



(工 14 SU176)

器種：植木鉢
土師質

D Z - 21 - b



(工 14 SK140)

器種：植木鉢
瓦質

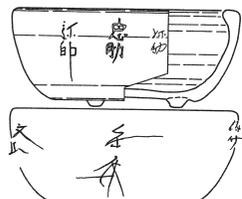
D Z - 21 - c



(御殿 7)

器種：植木鉢
施釉

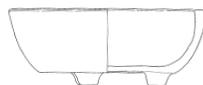
D Z - 31 - a



(中診 H21 - 3)

器種：火鉢
土師質丸火鉢

D Z - 31 - b

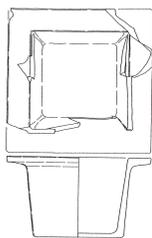


(御殿 475)

器種：火鉢
軟質瓦質丸火鉢

DZ

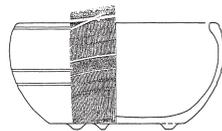
D Z - 31 - c



(外来 SU105)

器種：火鉢
鏝付角火鉢，掘炬燵

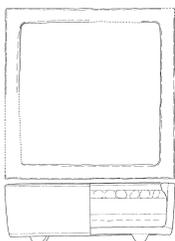
D Z - 31 - d



(外来 SK98)

器種：火鉢
硬質瓦質丸火鉢

D Z - 31 - e



(法 B7 - 7号土坑)

器種：火鉢
土師質角火鉢

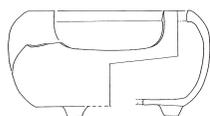
D Z - 31 - f



(御殿 904)

器種：火鉢
軟質瓦質角火鉢

D Z - 31 - h



(外来 SK18)

器種：火鉢
風炉

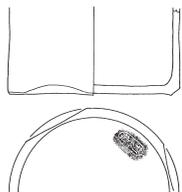
D Z - 31 - i



(設備 Z35 - 4)

器種：火鉢
火消壺

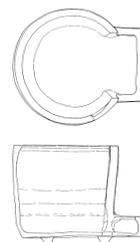
D Z - 31 - j



(工 14 SU396)

器種：火鉢
硬質瓦質筒形火鉢

D Z - 31 - k



(中診 D30 - 1)

器種：火鉢
カマド

D Z - 31 - l



(御殿 464)

器種：火鉢
土師質筒形火鉢

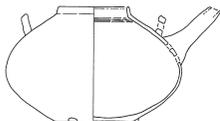
D Z - 33 - a



(中診 H21 - 2)

器種：鍋
紐状把手貼付，鉛釉

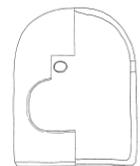
D Z - 34



(外来 SK81)

器種：土瓶

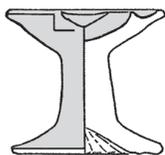
D Z - 38



(工 14 SK335)

器種：手焙り

D Z - 40 - a



(中診 H21 - 1)

器種：油受け皿
透明釉，脚付

D Z - 40 - b



(中診 H21 - 1)

器種：油受け皿
透明釉，脚無

D Z - 40 - c



(中診 F33 - 3)

器種：油受け皿
無釉，脚付

D Z - 40 - d



(中診 F33 - 3)

器種：油受け皿
無釉，脚無

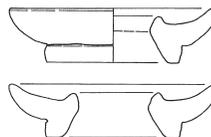
D Z - 40 - e



(構内試掘)

器種：油受け皿
透明釉，長脚付

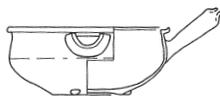
D Z - 40 - f



(工 14 SK10)

器種：油受け皿
ドーナツ形

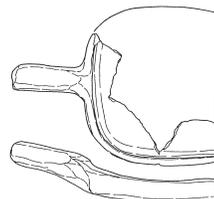
D Z - 42



(中診 H21 - 1)

器種：行平鍋

D Z - 43



(中診 E34 - 5)

器種：十能

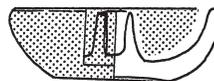
D Z - 44 - a



(尾張産 67 - 4N - 1)

器種：ひょうそく
無釉，脚付

D Z - 44 - b



(外来 SK380)

器種：ひょうそく
透明釉，脚無

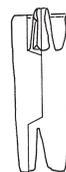
D Z - 44 - c



(中診 L34 - 1)

器種：ひょうそく
無釉，脚無

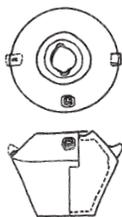
D Z - 44 - d



(工 14 SK292)

器種：ひょうそく
ろうそく状

D Z - 44 - e



(中診 E24 - 1)

器種：ひょうそく
透明釉，そろばん玉形

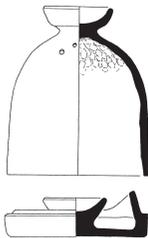
D Z - 44 - f



(中診 E24 - 1)

器種：ひょうそく
施釉，脚付

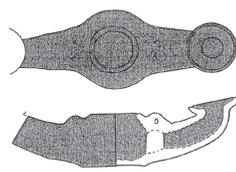
D Z - 45



(設備 Y37 - 3)

器種：瓦燈

D Z - 46



(給水 AJ37 - 3)

器種：カンテラ

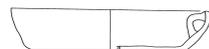
D Z - 47 - a



(工 14 SK335)

器種：ほうろく
丸底

D Z - 47 - b



(家畜 SK09)

器種：ほうろく
平底

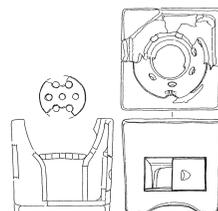
D Z - 48 - a



(工 14 SU18)

器種：七輪
丸形七輪

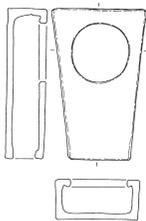
D Z - 48 - b



(設備 AD34 - 1)

器種：七輪
箱形七輪

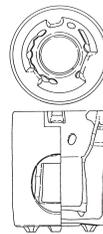
D Z - 48 - c



(理 5号地下式土坑)

器種：七輪
風口

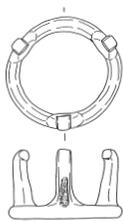
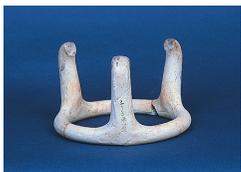
D Z - 49



(工 14 SU389)

器種：涼炉

D Z - 50



(数理 SK13)

器種：五徳

D Z - 51 - a



(御殿 532)

器種：塩壺
輪積成形, ミなと藤左衛門

D Z - 51 - b



(御殿 276)

特徴：塩壺

輪積成形，一重杵 天下一堺ミなど藤左衛門

D Z - 51 - c

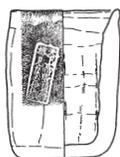


(御殿 678)

器種：塩壺

輪積成形，二重杵 天下一堺ミなど藤左衛門

D Z - 51 - d



(中診 F31 - 1)

器種：塩壺

輪積成形，天下一御壺塩師堺見など伊織

D Z - 51 - e

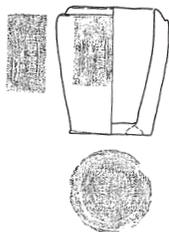


(福利 SU16)

器種：塩壺

輪積成形，御壺塩師堺湊伊織

D Z - 51 - f



(中診 F34 - 11)

器種：塩壺

板作成形，御壺塩師堺湊伊織

D Z - 51 - g



(中診 D33 - 1)

器種：塩壺

板作成形，泉湊伊織

D Z - 51 - h



(御殿 391)

器種：塩壺

板作成形，小杵 泉州麻生

D Z - 51 - i

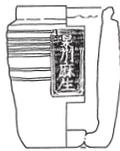


(中診 F34 - 11)

器種：塩壺

板作成形，大杵 泉州麻生

D Z - 51 - j



(工 14 SK415)

器種：塩壺

板作成形，泉州磨生

D Z - 51 - k



(外来 SK290)

器種：塩壺

板作成形，サカイ 泉州磨生 御塩所

D Z - 51 - l



(工 14 SK140)

器種：塩壺

板作成形，泉州麻玉

D Z - 51 - m

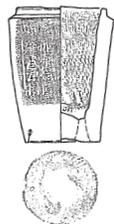


(中診 G20 - 2)

器種：塩壺

板作成形，泉川麻玉

DZ-51-n

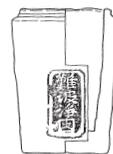


(中診 C28-4・5)

器種：塩壺

板作成形，御壺塩師難波浄因

DZ-51-o



(尾張嶋) 70-4C-1)

器種：塩壺

板作成形，難波浄因

DZ-51-p

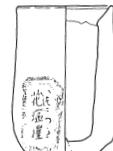


(理 4号井戸)

器種：塩壺

板作成形，摂州大坂

DZ-51-q

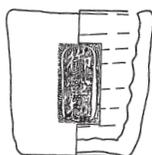


(御殿 802)

器種：塩壺

板作成形，イ津ミ つた 花塩屋

DZ-51-r



(工 14 SK99)

器種：塩壺

板作成形，御壺塩

DZ-51-s

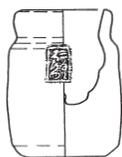


(外来 SK18)

器種：塩壺

板作成形，大上々

D Z - 51 - t

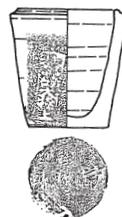


(薬新 SE67)

器種：塩壺

ロクロ成形，三など久左衛門

D Z - 51 - u



(中診 H21 - 1)

器種：塩壺

ロクロ成形，播磨大極上

D Z - 51 - v



(設備 AD35 - 2)

器種：塩壺

ロクロ成形，大極上壺塩

D Z - 51 - w

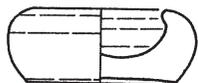


(設備 Y36 - 2)

器種：塩壺

ロクロ成形，筒形，無印

D Z - 51 - x



(中診 遺構外)

器種：塩壺

鉢形，内湾

D Z - 51 - y

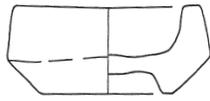


(中診 E34 - 1)

器種：塩壺

鉢形，直立

D Z - 51 - z



(外来 SK279)

器種：塩壺
鉢形，碁笥底

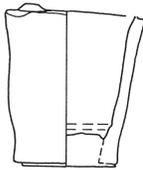
D Z - 51 - aa



(看宿 SK275)

器種：塩壺
輪積成形，無印

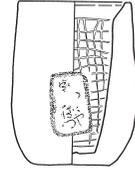
D Z - 51 - ab



(I 14 SK10)

器種：塩壺
板作成形，無印

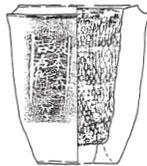
D Z - 51 - ad



(病棟 D2層)

器種：塩壺
板作成形，いつミヤ 宗左衛門

D Z - 51 - ae



(外来 SK290)

器種：塩壺
板作成形，堺本湊吉右衛門

D Z - 51 - af



(I 14 SU357)

器種：塩壺
板作成形，堺湊塩濱長左衛門

DZ

D Z - 51 - ag



(看宿 C面上焼土層)

器種：塩壺
板作成形，泉川麻生

D Z - 51 - ah



(中診 池)

器種：塩壺
輪積成形，袋状

D Z - 52 - a



(外来 SK392)

特徴：燭台
筒形

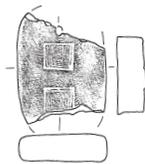
D Z - 52 - b



(中診 H21 - 3)

器種：燭台
薄形，扁平

D Z - 54



(外来 SU58)

器種：懷炉

D Z - 55



(工 14 SK188 ほか)

器種：泥面子・芥子面

D Z - 56



(工 14 SK331 ほか)

器種：碁石形土製品

D Z - 57



(家畜 SU02)

器種：玉

D Z - 58



(工 14 SK188 ほか)

器種：鈴

D Z - 59



(工 14 SU02 ほか)

器種：笛

D Z - 60 - a



(中診 F34 - 11, 工 14 SU63 ほか)

器種：西行

D Z - 60 - b



(工 14 SK387 ほか)

器種：天神

D Z - 60 - c



(家畜 SU02)

器種：恵比寿・大黒

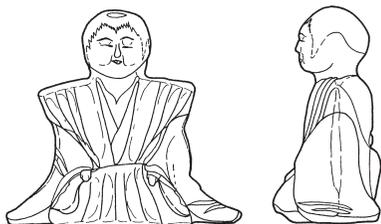
D Z - 60 - d



(工 14 SU381)

器種：姉様

D Z - 60 - e



(済海寺 第 11 号墓)

器種：裃人形

D Z - 60 - f



(工 14 SK293, SU357)

器種：ぶら人形

D Z - 60 - g



(外来 SK152 ほか)

器種：猿

D Z - 60 - h



(工 14 SK415 ほか)

器種：馬

DZ

D Z - 60 - i



(工 14 SK301 ほか)

器種：犬

D Z - 60 - j



(家畜 SU02 ほか)

器種：狐

D Z - 60 - k



(工 14 SK02)

器種：虚無僧

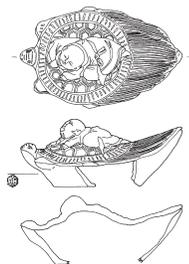
D Z - 60 - l



(病棟 NO.3310 包含層)

器種：狛抱き童子

D Z - 60 - m



(工 14 SK02・03)

器種：亀乗り童子

D Z - 60 - n



(工 14 SK03 ほか)

器種：嵯峨人形系

D Z - 61



(工 14 SU295 ほか)

器種：ミニチュア

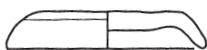
D Z - 62



(工 14 SK337 ほか)

器種：面形

D Z - 00 - a



(御殿 532)

器種：蓋

ドーム形，無印，塩壺

D Z - 00 - b

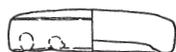


(設備 Y35 - 4)

器種：蓋

凹形，御壺塩師難波浄因，塩壺

D Z - 00 - c



(中診 D34 - 1)

器種：蓋

凹形，無印，塩壺

D Z - 00 - d



(給水 AJ34 - 2)

器種：蓋

断面逆台形，無印，塩壺

DZ-00-e



(中診 F33-3)

器種：蓋

断面長方形，イツミ 花焼塩 ツタ，
塩壺

DZ-00-f



(中診 遺構外)

器種：蓋

断面長方形，深草砂川権兵衛，塩壺

DZ-00-g



(給水 AJ38-3)

器種：蓋

断面長方形，無印，塩壺

DZ-00-h



(工 14 SK330)

器種：蓋

DZ-31-iの蓋，火消壺，塩壺

DZ-00-i



(外来 SK220)

器種：蓋

DZ-44-eの蓋，そろばん形，
ひょうそく

DZ-00-j



(御殿 802)

器種：蓋

ドーム形，いつミヤ 宗左衛門，塩壺

DZ

D Z - 00 - k



(中診 遺構外)

器種：蓋

凸形，無印，塩壺

D Z - 00 - l



(御殿 遺構外)

器種：蓋

凸形，なんばん七度 本やき志本，塩壺

D Z - 00 - m



(中診 H21 - 2)

器種：蓋

DZ - 42 の蓋，行平鍋

D Z - 00 - n



(中診 遺構外)

器種：蓋

DZ - 34 の蓋，土瓶

1. 分類の目的

江戸遺跡の調査で大量に出土する遺物群の資料化についての議論は、その当初から行われてきている。当初の「どのようなものがあるのか」から「どのようなもので構成されているのか」を経て、現在は「どのような量で構成されているのか」の段階に至っていると考えている。時代の近接する中世の研究では、80年代初めより「遺物の組み合わせ (Assemblage)」という考え方から議論がなされ、共通のフォーマットに立脚したデータの呈示から、個々の遺構、遺跡に対する評価から機能分担、汎日本的な地域相、流通の議論にまで昇華させている。この方法論は江戸時代に拡大することは可能であろうし、その性格から遺物量の多い江戸のような時代または場所において、より適した方法論であると考えている。一方、江戸遺跡における定量分析の方向性と実際は、森本伊知郎による報告 (森本 1987, 1989, 1991)、長佐古真也の方法論 (長佐古 1990)、東大の報告 (成瀬・堀内 1990)、井汲隆夫による新宿区の報告 (井汲 1991, 1992 など) によって 1990 年前後に示されて以降、新宿区によるデータの呈示以外には継承されているとは言い難い。これは方法論としての是非よりも、資料化するにあたっての作業量の膨大さ、分類基準の不統一、単位系の問題などが現実問題として障壁となっていると考えられる。

分類についてはその多くが出土遺物の様相理解のためのものであり、近世遺跡の調査においても当初からさまざまな基準からの分類が試みられている。これら分類における評価については本稿の論旨とはずれるので言及しないが¹⁾、少なくとも「分類がある目的を評価するための手段である」ことについては既に共通の認識として考えてもよいだろう。筆者らもこの立場から器種組成、産地組成の分析から江戸時代の①文化相の復元 (衣・食・住文化など)、②社会・経済相の復元 (流通、階層性など)、③年代相の復元 (編年など) を目的とするものである。ここであげた目的である文化相、社会・経済相の復元、時間軸の構築を行う手段として定量的分析法が現段階では極めて有効な分析法であると考えており、分類はその前段として一定の基準を定めるものである。

筆者らは以前、東京大学本郷構内の遺跡 (以下「東大構内遺跡」と略す)、医学部附属病院地点 (以下「病院地点」と略す) の報告の中で「消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析」と題して出土陶磁器類の分類を行った。さらに遺構単位で数量呈示を行い、そのデータを基に不十分ながら当該地点の出土資料から自律的な編年、器種の流通などについて考察を加えた (成瀬・堀内 1990)。その後、編年に関しては調査例の増加、研究の進展などを踏まえて東大構内遺跡における基本的な時間軸を呈示した (堀内 1992b, 1996, 1997)。作業の手順は逆になってしまったが、本稿では東大構内遺跡出土陶磁器・土器類の分類を再呈示するものである。 (堀内)

2. 分類の方法

分類の方法に関してはこれまで種々の議論があり、現実的に共通のフォーマットを作ることは不可能とされている。このことが「分類法は現状ではかなり混乱しているといわねばならず」(岩橋 1994)と誤解、敬遠されている要因であると考えられる。しかし、目的を異にしている分類間ではその項目、階層などが異なるのは当然として、種々の議論に必要な項目 (胎質、器種、生産地などの分類項目) の存否こそが問われるといえよう。このことは例えば基本的立場が違う筆者らが行った病院地点での分類と新宿区における分類との間で全く比較ができないといった齟齬が必ずしも生じていないことから理解できる。したがって、遺物全体を対象とするような分類では、種々の異なる目的にも対処できうる精度が必要になろう。もちろんこのような分類に対して遺物個々に対する論文などで取り扱うレベルの細分は不要であろうし、共通認識と位置づけられた精度が基本

となることはいうまでもない。

○胎質

J (磁器) T (陶器) D (土器)

○生産地

A - 輸入陶磁器

- A 1 景德鎮窯系
- A 2 漳州窯系
- A 3 徳化窯系
- A 4 龍泉窯系
- A 5 宜興窯系
- A 6 朝鮮
- A 7 ベトナム
- A 8 ヨーロッパ

B - 肥前系

C - 瀬戸・美濃系

D - 京都・信楽系

E - 備前系

F - 志戸呂系

G - 常滑系

H - 萩系

I - 萬古系

J - 大堀・相馬系

K - 丹波系

L - 堺系

M - 益子・笠間系

N - 九谷系

O - 壺屋系

P - 淡路系

Z - 不明

○器種

- | | | | | |
|-----------|----------|---------|-----------|-------------|
| 1. 碗 | 2. 皿 | 3. 大皿 | 4. 爛徳利 | 5. 鉢 |
| 6. 坏 | 7. 猪口 | 8. 仏飯器 | 9. 香炉・火入れ | 10. 瓶 |
| 11. 御神酒徳利 | 12. 油壺 | 13. 蓋物 | 14. 筆立て | 15. 壺・甕 |
| 16. 急須 | 17. 爛鍋 | 18. 合子 | 19. 水滴 | 20. 蓮華 |
| 21. 植木鉢 | 22. 花生 | 23. 片口鉢 | 24. 灰落し | 25. 鬢水入れ |
| 26. 茶入れ | 27. 水注 | 28. 洩瓶 | 29. 搦鉢 | 30. 餌入 |
| 31. 火鉢 | 32. 柄杓 | 33. 鍋 | 34. 土瓶 | 35. 戸車 |
| 36. ちろり | 37. 薬研 | 38. 手焙り | 39. おろし皿 | 40. 油受け皿 |
| 41. 油徳利 | 42. 行平鍋 | 43. 十能 | 44. ひょうそく | 45. 瓦燈 |
| 46. カンテラ | 47. ほうろく | 48. 七輪 | 49. 涼炉 | 50. 五徳 |
| 51. 塩壺 | 52. 燭台 | 53. 蒸し器 | 54. 懐炉 | 55. 泥面子・芥子面 |
| 56. 碁石形製品 | 57. 玉 | 58. 鈴 | 59. 笛 | 60. 人形 |
| 61. ミニチュア | 62. 面型 | | | 00. 蓋 |

分類は東大構内遺跡より出土した江戸時代の陶磁器・土器類の量産品を対象に行う。中世以前または近代以降の生産品、あるいは稀少性が高く、共通の認識が得難いものについては、対象とした項目を理解する上で必要な一部を除き、分類から除外する。

分類を行うにあたっての基本的な立場は、病院地点の方法を踏襲する。先述した文化相、社会・経済相、年代相の復元にあたって基礎資料となる産地組成と器種組成両方からの検索を容易にできるように双方とも独立した項目として設定を行う。表記は従来通り胎質・産地-器種-小器種²⁾の順で行う。(堀内)

A, 胎質

胎質は磁器(J)、陶器(T)、土器(D)に分類した。この中での問題点は、出土陶磁器の可視的に得られる観察が伝統的な位置づけに対して違和感を覚える場合が少なくないことであろう。軟質施釉陶、華南三彩陶、彩色した伏見人形、李朝の白磁、高麗青磁、イギリス・オランダのプリントウエアなどがその代表例として挙げられよう。また、原料の質、精製度、焼成温度などによっても、さらに観察者によって異なる認識に至ることも往々にしてある。

現在、化学あるいは工業的な陶磁器の分類では材料、吸水性、反射率、焼成温度、白さなどを基準とし、磁器、炆器、陶器、土器に分けられている。さらに、磁器は軟磁器と硬磁器に、炆器は粗炆器と精炆器に、陶器は粘土質陶器、長石質陶器、ドロマイド質陶器に分けられ、硬磁器や長石質陶器はさらに細分されている。現在では低火度で焼成できる硬磁器の開発などによる技術的な進歩によって既成の分類の中では位置づけられない製品も現れている。結果的に化学といった領域においても検査法、ボーダーラインの設定などに国や機関の中で差違がみられ、統一的な規準にはなっていない。

一方、考古学的にこれらを位置づけるにあたって江戸時代の製品に限ってみてもここで指摘した問題の解決には、時間と手続きがいるであろうし、また、現段階での議論の中にはこうしたものの厳密な分類の必要性はないであろうと考えている。従って、今回の分類ではこれまでの研究での位置づけを尊重した。

炆器は陶器に、瓦器は土器に含むものとする。また、輸入陶磁器については従来の研究を踏襲し、景德鎮窯系、漳州窯系、徳化窯系、龍泉窯系は磁器、宜興窯系、ベトナムは陶器、ヨーロッパのプリントウエアは磁器、ストーンウエアは陶器、朝鮮は象嵌青磁、白磁が磁器、粉青沙器、灰釉陶が陶器として分類する。(堀内)

B, 産地

産地を分類の項目に入れることについての最大のデメリットは、出土遺物自体の観察から得られる属性ではないことである。検証なしに安易に産地推定を行った結果、種々の混乱³⁾を招いたことは筆者もその一人として自省するところである。しかし、社会・経済相の復元に際しては重要なファクタとなりうると考えており、現時点での研究成果を踏まえて分類を行った。従って、産地の推定ができないものや伝承的に認識されているものについては産地不明といったコードの中に位置づけている。ここでは分類した器種又は小器種ごとにできうる限り産地での出土状況を記載し、産地判断の論拠として呈示する。

産地は国内の主要産地16カ所及び国外を設定した。国外は「輸入陶磁器」としてこれまで一括していたが、研究状況を踏まえて8カ所を設定した。(堀内)

○A 1

景德鎮窯系陶磁器をA 1とする。

JA 1 (景德鎮窯系磁器)

景德鎮窯は、江西省饒州府浮梁県にある磁器窯である。14世紀以降呉須で釉裏に施文し、青く発色する青花磁器の一大生産地として発展し、少なくとも日本で有田が染付磁器の輸出を開始する17世紀以前には世界的に見ても生産量、技術的にもほぼ独占状態であったといえる。日本では16世紀以降、青磁に代わる磁器製品として受け入れられ、特に「明末清初」と称される戦国期から江戸時代初期にかけて全国の遺跡から多量に出土している。特に該期の製品は雑器と共に「古染付」、「祥瑞」と呼ばれる日本の精神文化の中で位置づけられる製品が多く日本に入っている。消費遺跡では17世紀中葉以降、肥前系磁器が国内に流通し始め、急速に姿を消すが、18世紀末から再び一定量出土するようになる。また、生産地一特に肥前や瀬戸・美濃ではその磁器生産開始当初には景德鎮窯系磁器のコピーから始めており、成形技法、施文技法、器形、文様などに大きな影響を与えている。

東大構内遺跡では、1類(碗)、2類(皿)、3類(大皿)、5類(鉢)、6類(坏)、10類(瓶)、13類(蓋物)、15類(壺・甕)、18類(合子)、27類(水注)などの器種が出土しているが、2類が最も量的に多い。大半が明末の青花で、他に色絵、瑠璃釉などがある。

JB(肥前系磁器)との比較からその主な相違点を指摘すると以下ようになる。

- ・生地が硬質な感じを受ける。
- ・高台裏に削り出しのカンナ痕が放射状に残るものが多い。
- ・高台が施釉したのちに削り出されるため、釉際が直線的に揃えられている。
- ・底径の大きい皿においても肥前の製品に見られるハリ支えが認められない。
- ・上手の製品では呉須の発色がやや青みが強くなっている。
- ・雑器には畳付に茶褐色の粗砂粒が多く付着している。
- ・口唇部には釉と素地の収縮率の違いによって起こる「虫喰い」と称される破損が認められる。(堀内)

○A 2

漳州窯系陶磁器をA 2とする。

JA 2 (漳州窯系磁器)

漳州窯は福建省漳州府の平和県、詔安県、南靖県、漳浦県、華安県、雲霄県などに分布する磁器窯である。本群はこれまで陶磁器研究の中では呉州(呉須、呉洲)手、呉州(呉須、呉洲)赤絵、餅花手などと称され、また、ヨーロッパやアメリカではこれらのものを輸出の積出港である汕頭に由来してスワトウ・ウエアと呼ばれているものである。16世紀末から17世紀前半にかけてアジアを始めイスラム圏やヨーロッパ圏に多く流通し、日本においても「下手の南京もの」といった位置づけの中で皿、鉢類などの雑器を中心に輸入され、該期の遺跡からはそれらが大量に出土している。しかし、一方ではそれのもつ素朴で粗い作りがかえって茶の湯の道具として珍重され、国内においても肥前、京都などでこの写しが生産されている。生産地については近年まで、福建省・広東省であろうと漠然とした認識であったが、栗建安を初めとする福建省博物館や平和県博物館らの調査によって漳州地区平和県で窯跡が確認された(栗1993)。また、その後の日中共同研究によって窯跡群の範囲や製品の分析から呉州手の主たる生産地が漳州地区であることが確認された(西田記念東洋陶磁史研究グループ1994、福建省博物館1997)。

JA2は青花、色絵、柿地餅花、瑠璃地餅花の他、白呉州、青磁などがある。

JA1 (景德鎮窯系磁器) との比較からその主な相違点を指摘すると以下ようになる。

- ・生地が軟質で灰色がかっている。
- ・釉薬は厚く掛けられ、透明感がない。
- ・多くは底部に粗い白色～褐色の砂粒が付着している。
- ・釉飛び、釉切れ、ヒビなどが多く見られる。

東大構内遺跡では1類(碗), 2類(皿), 3類(大皿), 5類(鉢), 18類(合子)などの器種が出土しているが、最も多いのは2,3類である。(堀内)

○A3

徳化窯系陶磁器をA3とする。

JA3 (徳化窯系磁器)

徳化窯は福建省徳化県に分布する宋から清代までの窯の総称である。徳化県は廈門港の北方に位置し、宋から清代に至るまで200ヶ所あまりの窯が確認されている。年代的には明、清代の窯が最も多い。徳化窯の製品はほとんど白磁であるが、清代には色絵や青花もつくられる。器種は人形、調度品などに優れているものが見られるが、大半は碗や皿などの雑器である。

徳化窯の製品が江戸遺跡で出土するのは17世紀中頃からであるが、多くは18世紀後半以降で、19世紀中頃が最も多くみられる。この時期に同時に出土している輸入磁器にはJA1(景德鎮窯系)または中国南部と推定されるものなどがあり、いずれも碗・小坏がほとんどである。徳化窯系の製品はほとんどが端反形碗で、白磁と色絵が出土している。成形技法は型作りのため高台の裏にはちぢみが見られ、無釉のものや施釉されているものがある。また、畳付には砂が溶着しているものがある。窯積みの際には合わせ口、また伏せて焼成するために口縁部は釉剥ぎされている。

長崎市築町遺跡では寛文三(1663)年の焼土層から白磁の碗が出土している。型成形で見込みに胎土目が4ヶ所あり、底部は無釉である。江戸遺跡では千駄ヶ谷五丁目遺跡の1680年代の遺構(0079号遺構)から白磁の梅花坏が出土している。

東大構内遺跡では、白磁と色絵の1類(碗)が出土している。(坂野)

○A4

龍泉窯系陶磁器をA4とする。

JA4 (龍泉窯系磁器)

龍泉窯は浙江省の龍泉県、雲和県、麗水県、遂昌県、永嘉県にまたがる青磁窯である。もとは越州窯系の窯であったが、11世紀には龍泉窯としての特徴を備える製品を焼成したと考えられている(矢部1977)。以後、南宋から元にかけて隆盛するが、明に入り、青花磁器と代わるように衰微していく。この間、陶磁史の中では砧青磁、天龍寺青磁、七官手青磁など製品の特徴から名づけられた分類がある。考古学においては太宰府の資料の分析において示された貿易陶磁器の分類、位置づけが龍泉窯系磁器を解釈する上での基準資料になっている(横田・森田1978)。しかし、16世紀中葉までの議論を最後に龍泉窯終末期の様相については全く不明である。東大構内の資料はこれまでの研究の中ではほとんどが14～15世紀を中心とした年代の製品が伝世したものと位置づけられる。

肥前系の青磁と比較して、釉薬が厚くかけられている、3類(大皿)の高台裏の蛇ノ目釉剥ぎがカンナで行われていないため、きれいな蛇ノ目状にならない、大型製品を中心に釉薬を複数回重ね塗りしているなどの特徴を有する。

東大構内では2類(皿), 3類(大皿), 9類(香炉・火入れ), 10類(瓶), 15類(壺・甕), 22類(花生), 27類(水注)などがある。(堀内)

○A 5

宜興窯系陶磁器をA 5とする。

T A 5 (宜興窯系陶器)

宜興窯は中国江蘇省太湖の西部に位置し、蜀山の周囲に点在する窯の総称である。古くから日常雑器を作っていたが、明末の頃に茶器(急須、水注、坏など)、文具(水滴、文鎮、筆筒など)、調度品(植木鉢、花器など)が生産され、特に小振りの急須を作ることで有名になる。清代に入り、①中国では喫茶の方法が抹茶から煎茶に変わる、②欧州へ茶葉の輸出が盛んにされる、③日本へ煎茶の文化が伝わるなどから、これらの地域で宜興窯の急須や水注が愛好され、盛んにつくられた。

消費地では宜興窯系の製品が出土するのは極めて少ないが、長崎市築町遺跡では寛文三(1663)年の大火層から紫泥急須の蓋が2点と紫泥急須が蓋付きで出土している。また、東大構内遺跡では、1680年代の廃棄と推定される中央診療棟地点F34-11から小振りの16類(急須)の蓋が出土している。山形になっている蓋の表面には黄色の砂粒がみつめられ、いわゆる梨皮俱輪珠といわれる急須の蓋とおもわれる。また、工学部14号館地点では19世紀後半に「萬豊順記」の刻印が押されている後ろ手の急須が出土している。医学部附属病院病棟地点(以下、「病棟地点」と略す)では遺構外であるが「貢局」の刻印がある後ろ手の急須が出土している。いずれも茶滓留めが単孔であるため水滴としての用途も考えられる。

宜興窯系陶器の特徴は、以下の通りである。

- ・胎土は鉄分が多く含まれ、焼き手によって朱泥、紫泥、烏泥に分類される。
- ・装飾に黄土を使うこともある。
- ・成形技法は型作り、轆轤、はりつけなどがある。
- ・焼締めがほとんどであるが、粉彩の影響を受けた色絵や、施釉されたものなどがある。
- ・器種は瓶、水注、茶注(水滴)、植木鉢、装飾品などがある。
- ・刻印が押されていたり詩文などが釘彫されているものがあるが、年代的に確証できるものではない。刻印には「萬豊順記」、「三友居」、「恵孟臣」、「貢局」などがある。(坂野)

○A 6

朝鮮の陶磁器をA 6とする。

9世紀後半、高麗時代には青磁と白磁が焼かれ始めたとされていて、磁器生産は世界的にも中国に次いで早い。高麗時代の青磁は無文、陰刻、陽刻、象嵌、鉄絵、辰砂などの技法があり、これらは高麗青磁とよばれている。これは14世紀末高麗の滅亡とともに衰退するがその技法は次の時代の粉青沙器の中に伝えられる。14世紀末頃から粉青沙器(粉粧灰青沙器の略称)が焼かれる。粉青沙器は施釉の方法、文様の表し方によって象嵌文、印花文、刷毛目などの種類に分けられる。16世紀末になると粉青沙器は消滅し、白化粧や文様のない灰

釉系雑釉陶器が主流になってゆく。一方、白磁は15世紀中頃から青花、鉄絵、辰砂などが加わり、日本で好まれている秋草手といわれている青花は17世紀後半につくられている。朝鮮の陶磁器は常に中国の影響を受けてきたが、色絵はつくられなかった。

16世紀末頃、朝鮮から多くの陶工が日本に渡来し、朝鮮の焼成技術が肥前や萩などに伝わる。特に肥前においては17世紀に施釉陶器の大量生産が行われるようになり、また磁器焼成への土台となる。

この頃日本では茶の湯の流行に伴い、朝鮮へ茶器の注文を出したり、日本の陶工を朝鮮に派遣し焼造にあたらせるなどして、朝鮮陶磁は茶器として盛んに賞用された。しかし、茶の湯の道具として伝世されている茶碗の分類は20種類以上になるが、それらの窯は明らかにされていない。

16世紀から17世紀の初頭、朝鮮陶磁が出土するのは長崎、一乗谷、大坂、京都、堺などがあげられる。これらの遺跡では17世紀初頭までは高麗青磁、粉青沙器、白磁、雑釉陶などがみられ、器種は、碗、皿、鉢、鉢、壺、瓶類が出土している。17世紀中頃になると出土量が極めて少なくなり、器種も碗、皿がほとんどである。

東大構内遺跡では、山上会館地点の35号遺構から高麗象嵌青磁の梅瓶、100号遺構から刷毛目の瓶などが出土している。また、医学部附属病院看護婦宿舎地点（以下、「看宿地点」と略す）SK299の資料があり、「高麗筒茶碗」、「斗々屋茶碗」、「蕎麦茶碗」、白磁の碗に、共存遺物として13世紀頃の中国の建盞、青磁の天目台、香炉、硯屏などが出土している。これらは茶の湯及び書院飾りの一式と思われ、ある期間伝世されていたものと考えられる。

これまでに出土した朝鮮陶磁の特徴をみると、磁器、陶器とも碗には畳付、皿には畳付と見込みに数カ所の砂目が見られるものが多い。白磁はJB（肥前系磁器）と比較して胎土や釉薬に硬質感がなく、また、純白度に欠けているなどの特徴が指摘できる。ただ、TB（肥前系陶器）とは製作技法、窯積み、器形、釉調などの共通性が多く、現時点で朝鮮陶磁器を分類するのは資料の集積が不十分と思われる。今後、朝鮮、日本の肥前、萩、高取などの窯址調査の増加を待ちたい。（坂野）

○A7

ベトナムの陶磁器をA7とする。

日本に輸入されたベトナム陶磁器に関しては、森本朝子の研究がある（森本1993、1995）。森本は日本における出土状況、現地の動静などから、第1期（14世紀中葉～15世紀初頭）、第2期（15世紀中葉～16世紀初頭）、第3期（16世紀中葉～17世紀中葉）、第4期（17世紀中葉～18世紀中葉）の4期に分類している。このうち江戸時代に関係するのは、第3、4期である。

第3期では、青花、白磁、鉄絵による碗、皿の他、焼締めめ長胴瓶などがみられる。第4期では、第3期にみられた焼締め陶器の他、鉄絵印花皿がみられる。これらの製品は、堺、大坂、長崎、平戸、博多等の主要港湾都市遺跡から検出されている。このうち江戸遺跡からは、焼締めめ長胴瓶、小瓶（いわゆる「ちまき」）や鉄絵印花皿の出土が報告されている。

焼締めめ長胴瓶は、續伸一郎によって詳細に分類されているが（續1993）、A類と分類された帯状口縁に約2条の沈線を施した長胴瓶は、中部ベトナムのミースェン・フックティク窯跡群などで発見され、B類と分類された頸部から胴部上半にかけて歯状工具による「縄籐文」と呼ばれる縦方向の集合条線を施した長胴瓶は、バンドン港周辺など北部ベトナム一帯に分布している。国内での出土例は、圧倒的にA類が多く、16世紀末～17世紀中頃にかけて出土例がみられる。江戸遺跡では、汐留遺跡の脇坂家上屋敷造成に伴う埋め立て層からの

出土報告例などがある。

鉄絵印花皿は、森本朝子の論考に詳しいが（森本 1992）、逆台形状の幅広高台を有し、体部が直線的に立ち上がる皿で、内面から体外部上半に白化粧土を施した後、透明釉を掛けている。また見込みは、直重ねによる窯積みのため、蛇ノ目状に釉剥ぎされている。文様は、放射状の線による花卉状の鉄絵印判が、内外両面に押印されている。このような印花を施した製品は、北部ベトナムのホプレー窯、バッチャン窯などで生産されている。国内では、大坂、堺、博多、長崎など西日本を中心として分布しており、江戸遺跡での検出例は、法学部4号館地点(東大構内遺跡)E8-2号土坑における元禄十六(1703)年の火災に伴う資料などがある。（成瀬）

○A 8

ヨーロッパの陶磁器をA 8とする。

J A 8 (ヨーロッパの磁器)

18世紀中頃にプリントウェアが、イギリスで発明された。このプリントウェアは、銅板転写による染付磁器のことで、胎土は白色で、軟質である。硬質磁器と対比して軟質磁器と呼ばれている。初期の頃は中国磁器のデザインを模倣した模様が、主にコバルトブルーで転写されていた。皿は、高台にハリ支えの痕を持つのが特徴である。

18世紀後半になると、シノワズリー（中国趣味）の模様が盛んに作られるようになる。その中でも、中国の物語に基づくとされているウィロウパターン（柳の図）の文様を好んで用いた。この物語は、実際はイギリスでの創作らしい（岡 1995）。

19世紀初頭になると技術的な進歩を遂げ、細密表現が可能になる。模様も風景画など、多様なものになる。プリントウェアには、色々なパターンの文様が施されており、そのパターンが作られた時期などからおおよその年代がわかるものもある。皿には、花の文様が多く使われていた（岡 1993）。日本にもこの頃になると、オランダ商館などを通じ、イギリスのスタフォードシャー窯などで焼かれた上級品のプリントウェアが入ってくるようになる。

19世紀中頃になると、オランダのマーストリヒト地方にあるレグウー窯でも、プリントウェアが盛んに作られるようになる。風俗画を主題とするもの、花のパターン、エキゾチックパターン、歴史パターンなど様々なデザインが用いられた。また、高台裏に窯の名や販売店などを示す印が付されている製品もあった。王冠と「PRIZE. MEDAL 1851 MILLER」と刻印されている印は、1851年の万国博覧会でメダルを受賞したことを示しており、1851年以降のものであることが解る。日本にも、オランダ製品が多く入ってくるようになる。イギリス製品も下級品が加わってくるが、オランダ製品の方が数多く輸入されるようである。

他に、コバルトが釉の下でにじむフロウン・ブルー（にじみ手）の製品も作られている。

江戸時代に、唯一外国との門戸を開いていた長崎では、新地唐人荷蔵跡、出島和蘭商館跡など、他の地域と比べて数多くのヨーロッパ製の軟質磁器が検出されている。江戸遺跡では、本郷追分遺跡、新宿内藤町遺跡、汐留遺跡、東京芸術大学構内遺跡などで検出されている。2類（皿）、5類（鉢）の出土例が多いようである。

東大構内遺跡でもいくつかの製品が見受けられる。桐野利秋邸跡などからである（堀内 1997）。2類（皿）、5類（鉢）などが出土している。プリントの色は青、黒、緑、赤、茶などがあるが、本遺跡では青、緑、黒が検出されている。

T A 8 (ヨーロッパの陶器)

17世紀になるとヨーロッパから陶器がわずかずつ入ってくるようになる。オランダのデルフト窯などで作られ、磁器に似せて作られた陶器である。柔らかい淡黄色の胎土に白釉を施した後でその釉が乾ききる前に橙、黄、藍、黄緑色の顔料で絵付けをするものである。日本では「阿蘭陀」の名称で、主に茶の湯の道具として用いられてきた。日本国内での発掘による出土例は、東大構内遺跡、増上寺徳川秀忠墓、丹後宮津城址、堺環濠都市遺跡、大坂城下で確認されているだけである。器種はほとんどが筒形で底部と口縁部がくびれているアルパレックロ形である。

東大構内遺跡で検出されているものは、藍色の顔料で絵付けが施されている。器種は小片のため確定できないが、2類(皿)、6類(坏)などに相当するものであろう。共伴遺物などから、17世紀後半頃と考えられている。また、オランダ製以外にも、ストーンウェアでドイツ製の27類(水注)も1点確認されている。このストーンウェアの胎土は暗褐色を呈している。おそらく鉄分を多く含んでいるためであろう。水注の注口の付け根部分で、獣顔のレリーフがあり、コバルトなどの釉が施されてる。日本国内での発掘による出土例は今のところ確認されていない⁴⁾。

18世紀頃のヨーロッパの陶器は東大構内遺跡では、確認されていない。

19世紀になると陶器に代わって多くの軟質磁器が入ってくるようになるが、東大構内遺跡では1点陶器が確認されている。ワインカップであるが、国内では類例をまだ確認できていないものである。文様のモチーフなどから、おおよその生産地は、19世紀中頃の新古典主義時代のヨーロッパと考えられるが、窯の特定はできていない。ビスケット地と呼ばれる赤褐色の胎土で作られている。(大貫)

○B

肥前系陶磁器をBとする。

J B (肥前系磁器)

JBは、佐賀県有田町を中心に展開した磁器窯である。大橋康二を中心とした考古学的な窯跡の調査、研究によって、生産技術、製品の編年に関する研究が急速に進み、相対年代による窯の序列及び、操業年代がほぼ確立されている(大橋1984, 1988, 1992など)。

肥前系磁器の創始は、秀吉の朝鮮出兵時に連れ帰られた朝鮮人陶工集団からの技術移入が考えられている。磁器が焼成された最も古い窯として、原明窯(西有田町)、天神森窯(有田町)などがあるが、これらの窯の物原では、下層に陶器の単独層、その上に磁器と陶器の混在層が認められ、同一窯で陶器生産から磁器生産への移行が窺われる。技術的にも陶器単独層の胎土目積みから、陶磁器混在層の砂目積みに変化しており、砂目積みによる製品が磁器生産の創始期の一つとして認められる。大橋編年のⅡ-1期にあたる(大橋1992)。年代的には、史料より寛永元(1624)年以前に磁器生産が行われたことは明らかであり、寛永十四(1637)年に行われた窯場の整理・統合を下限としている。この時期の磁器焼成窯は、西有田町から有田町西部に集中している。江戸遺跡では、東大構内遺跡病棟地点E層(江戸最下層)中より砂目積みによるJB-2-aが、丸の内三丁目遺跡52号土坑より吹き墨による意匠が施されたJB-2-aなどが出土しており、わずかではあるが江戸への流通が認められる。但し、量的に増加するのは次段階を待たなければならない。東大編年のIb期に該当する。

寛永十四年の窯場整理を契機に、磁器窯は、泉山磁石場周辺を中心とする13箇所の窯場に集約された。この事件を境に大橋編年ではⅡ-2期に移行するが、江戸遺跡においても本段階から武家地、寺社地を中心に磁器の流通量が増加している。山辺田窯、猿川窯(以上、有田町)、百間窯、ダンバギリ窯、窯ノ辻窯(以上、山内町)、

三股青磁窯(波佐見町)などが属する。本段階はいわゆる初期伊万里と呼ばれる壘付の幅が広く、高台断面が「U」字状または、逆台形状を呈した1類(碗), 2類(皿)が組成の中心を占める。1類では、染付、青磁染付、鉄釉掛け分けの底部無釉の製品(JB-1-b), 2類ではJB-2-aの他、高台径が口径の1/2に近づき断面形態が三角形を呈するJB-2-b, 蛇ノ目高台のJB-2-hに代表される。また高台内に「大明」などの銘款が付されたり、色絵が開始されるのも本段階である。東大編年ではⅡ期に該当する。

大橋編年Ⅲ期は、明末の動乱を背景に、オランダ東インド会社からの大量注文による海外輸出需要の増加に伴う、多くの技術革新が行われた段階である。長吉谷窯、楠木谷窯、柿右衛門窯(以上、有田町)などが属する。製品の特徴の一つに、高台断面形の変化があり、1類、2類を中心に、断面形が三角形を呈するようになる(JB-1-c, JB-2-c)。2類では、高台径が口径の1/2以上と大きく変化し、それに伴う製品のへたりを防止するためにハリ支えを使用する窯積み技法が用いられ、青磁の皿、鉢では、高台内側に蛇ノ目状に釉剥ぎし、チャツと呼ばれる窯道具をあてる窯積み技法が用いられる(JB-3-c, JB-5-c)。成形技法では、糸切り細工の貼り付け高台による変形皿が盛行する。装飾技法では、墨弾きや、金銀彩を用いた上絵付けが出現する。

江戸遺跡では、大名屋敷を中心とした火災一括廃棄資料などに、こうした最先端の製品がまとまってみられるケースがある(東大構内遺跡御殿下記念館地点678号遺構, 同中央診療棟地点L32-1, 同病棟地点C層, 汐留遺跡脇坂家6-K埋め立て層など)。一方で、下級武士階層などの屋敷跡より木場山窯(波佐見町)などで生産されたJB-2-kのような量産品もみられるようになり、江戸市場における肥前系磁器の需要の拡大傾向が窺える。東大編年ではⅢ期に該当する。

大橋編年Ⅳ期は、清朝磁器の輸出復活などの影響で、海外需要が低迷し、販路を国内にむける時期である。そのため生産工程を省略した量産品が、多量に作られ国内に出荷されるようになる。また、一方では、染錦と呼ばれる高級品をも生産した。

国内向けの肥前系磁器は、什器を中心に市場を開拓、拡大したが、大量生産を可能にし、価格を引き下げするためにコンニャク判、型紙摺りの印刷技法が多用された。また、意匠も五弁花文、環状松竹梅文など画一化されていく。

江戸遺跡の出土例でも、コンニャク判が施されるようになった元禄年間頃から急激に普及している。高尾窯(波佐見町)などで焼成されたJB-1-d, JB-1-uの報告例が、都内各地で増加している。この碗形が主体となる段階が、東大編年Ⅳ期である。18世紀第2四半期には、江戸遺跡のみならず周辺地域でも、百間西窯、長尾本登窯(以上、波佐見町)などで生産された、器壁が厚く、生掛けと考えられる粗雑な製品(JB-1-g, JB-1-v, JB-2-gなど)、見込み蛇ノ目釉剥ぎによる重ね焼きによって量産された製品(JB-1-x, JB-2-l, JB-2-m)が普及するようになる。18世紀の2類は、概して樋口窯(有田町)などで生産されたやや深めの五寸皿(JB-2-f)が盛行するが、第3四半期前後から、蛇ノ目凹形高台の製品に移行していく(JB-2-j)。この頃から広瀬向2号窯(西有田町)の製品にみられるように1類のバリエーションも増加する(JB-1-l, JB-1-j, JB-1-i, JB-1-qなど)。東大編年Ⅴ～Ⅵ期に該当する。

大橋編年Ⅴ期は、他生産地の磁器市場への参入により、国内における独占的立場に終止符が打たれた時期である。1類では、新たな形態としてJB-1-m, JB-1-n, JB-1-oなどがある。19世紀に入り(東大編年Ⅷa期)江戸市場では、一部に関西諸窯とされる製品を除けば、肥前、瀬戸・美濃の2大生産地によって磁器市場を二分することになる。しかし新規参入者でありながら瞬間に市場を開拓、拡大した瀬戸・美濃系磁器であったが、その主力商品は、肥前系磁器と比較して、小法量の端反形碗(JC-1-d)という新商品(JA1の模倣と考えられている)

にはほぼ集約されることから、見かけ上のシェアは増加しているが、少なくとも近世段階では、肥前系磁器の販売量の低下には直接結びつかなかったと考えられる。(成瀬)

TB (肥前系陶器)

陶磁器研究の中では「唐津焼」と称される一群と京焼風陶器、青緑釉製品、陶胎染付、呉器手など従来、「唐津焼」として認識されていなかった肥前製品も含む。周知のように唐津は豊臣秀吉による朝鮮出兵の際、連れてこられた朝鮮人陶工によって大きく生産量をのばし、日本における一大生産地として発展する。その背景には連房式登り窯や蹴轆轤など朝鮮人陶工らが持っていた先進技術があげられる。都市部を中心とした近世的な消費需要の中で、それに答える生産量を確保し得たことが大きな要因となった。消費遺跡では16世紀末から堺、大坂、京都など近畿の都市部を中心に西日本から北陸にかけて、その当初から大量の肥前系陶器が出土し、以降の陶器の主體的な供給地となっている。東日本においては17世紀前半まで肥前系陶器は散見されるものの、陶器の主体は依然瀬戸・美濃系であった。肥前系磁器が出土する寛永期以降において青緑釉製品、京焼風製品、刷毛目製品、象嵌製品、陶胎染付など特定の規格を持った製品が増加し、一定の割合を占めるようになる。この様なあり方は東日本太平洋側に同様に見られ、「唐津」は当初、陶器として売り込みには失敗したが、磁器製品が東国において成功すると、その販路を使い一定のシェアを確保し得た状況が看取できる。これらの地域において磁器生産以前の胎土目や砂目の製品の出土が少ないのはその証左といえるだろう。肥前系陶器の器種、器形、技法、文様の多くは李朝朝鮮のものと同じであり、また、同様の経緯で開窯した萩、上野、高取、薩摩などとの類似点も多い。しかし、江戸などで出土する肥前系陶器は、17世紀後半以降に定形化した製品群で、胎土、文様などの共通の特徴は少ない。

東大構内では1類(碗)、2類(皿)、3類(大皿)、5類(鉢)、6類(坏)、9類(香炉・火入れ)、10類(瓶)、13類(蓋物)、15類(壺・甕)、23類(片口鉢)、29類(搦鉢)などで、青緑釉製品は1,2,5類、京焼風陶器1,2,5,9類、刷毛目は1,5,9,13類、象嵌(三島手)は1,5類、陶胎染付は1,2,9,13類などが多く出土している。

(堀内)

OC

瀬戸・美濃系陶磁器をCとする

瀬戸・美濃地方は古代以来の窯業地であり、江戸時代においても依然として一大窯業地のひとつとして栄えた。窯の形態はそれまでの大窯から17世紀初頭にはほぼ一斉に大量生産を可能とする連房式登窯を導入する。この窯の転換には、肥前系陶磁器の台頭と都市部を中心とした近世的な消費需要の変化というものが少なからず起因したのであろう。しかし、一部には17世紀中葉まで大窯が残存し、天目茶碗や茶入れなどの茶陶関係の器種が焼成された。19世紀初頭には磁器の生産にも成功し、それ以後、磁器製品を「新製焼」、それまでの陶器製品を「本業焼」と称し両者が焼成される。そして、幕末頃から明治にかけて、生産の主体を陶器製品から磁器製品へ移行していったようである。

本来ならば社会・経済史の復元などを論考するにあたっては、瀬戸系、美濃系と二つに分類すべきなのだろうが、可視的に分類することが困難な製品が多いため(特に磁器について)今回も瀬戸・美濃系として一つの分類項目とした。なお磁器をJC(瀬戸・美濃系磁器)、陶器をTC(瀬戸・美濃系陶器)、所謂「太白手」はTC(瀬戸・美濃系陶器)に分類した。

JC(瀬戸・美濃系磁器)

文献からは磁器焼成を瀬戸・美濃地方で開始したのは瀬戸の陶工加藤民吉であり、1801年に熱田新田に築窯したのが最初であるとされる(加藤編 1972)。考古学的にも経塚山西窯(旧瀬戸村)などの調査から、19世紀第1四半期にはその焼成が確認されている(服部 1994)。東大構内においてもJCは享和二年(1802)年に構築された梅之御殿の遺構面より確認され、東大編年Ⅷa期(1800～1810年代)のメルクマールの1つにもなっている。JCの可視的特徴としては以下の点が挙げられる。

- ・胎土は白色を呈するガラス質で、光沢をもつ。
- ・呉須は青色から群青色を呈し、発色は良い。
- ・呉須絵の施される部分には細かな気泡が観察されるものが多い。
- ・文様として景德鎮や肥前の模倣をしたものが多くみられる。

東大構内遺跡からは1類(碗), 2類(皿), 6類(坏)などをはじめ様々な器種が出土している。ただし器種のバリエーションが増えるのは19世紀第2四半期以降である。量的には圧倒的に1類が多く、中でも端反形碗(JC-1-d)が多くを占める。

前述した胎土の特徴は、18世紀後半から19世紀前半に開窯した肥前以外の諸窯の製品に多く認められる特徴である。それらの窯の中で江戸のような大都市へ磁器を搬出する事が可能だったのは、窯業規模や地理的条件(輸送コスト、輸送日数など)の至便性を考慮すると、瀬戸・美濃地方と関西の諸窯であろう。ただし、関西の諸窯において考古学的調査がなされていない現時点では、出土した磁器中に関西の諸窯で焼成された製品が含まれていても、それを認識し選別することはかなり困難である。そのため、現実的には胎土に同様の特徴を持つ瀬戸・美濃系磁器と判断している製品も多いと考えられる。したがって将来的にJCが再分類されることも考えられる。

TC(瀬戸・美濃系陶器)

瀬戸・美濃系陶器については比較的調査・研究が進んでおり、植崎彰一氏、井上喜久男氏、田口昭二氏、藤沢良祐氏などにより瀬戸・美濃それぞれの連房式登窯の編年が示されている(植崎 1976, 井上 1980, 田口 1994, 藤沢 1987～1989など)。しかし両窯の編年的変遷過程は一致をみていない。また瀬戸では藤沢氏が地域全体の生産体制についても言及されているが、美濃では主として多治見、土岐、瑞浪の3地区で地区ごとの調査・研究が進められるにとどまり、地域全体の生産体制が明らかにされるまでには至っていない。

TCの特徴として、胎土が大別して2種類あることが挙げられる。①東本町A窯や勇右衛門窯(以上、旧瀬戸村)などの製品に見られるような、乳白色で、やや粗い胎土。②かみた窯、尾呂窯(以上、旧下半田川村)、平野西窯(旧多治見村平野)などの製品に見られるような灰色で、緻密な胎土。ただし、①、②の胎土以外に古瀬戸小西窯(旧瀬戸村)などで見られる刷毛目碗(TC-1-s)のような例外もあり、一概には言い切れない。

東大構内遺跡では肥前系陶磁器に次いで出土量が多く、東大編年のIからIX期を通じて認められる。主として出土する器種には1類(碗), 2類(皿), 5類(鉢), 9類(香炉・火入れ), 10類(瓶), 15類(壺・甕), 23類(片口鉢), 29類(搦鉢), 40類(油受け皿)などがある。中でも量的には1類, 10類, 29類が多い。1類は18世紀代にバリエーションが豊富になる。例えば、かみた窯、古瀬戸小西窯などで出土する所謂「せんじ」(TC-1-l)のように、他の窯業地製品の模倣をしたものや、生田9号窯(旧多治見村生田)、定助窯(旧瀬戸村)などで出土する拳骨茶碗(TC-1-p)、経塚山西窯などで出土する腰鍔碗(TC-1-u)、東本町A窯や生田9号窯などで出土する腰が張り二段の段を有する灰釉碗(TC-1-f)などのように、器形や釉調に工夫を凝らしたものなどがある。また、かみた窯や北丘11号窯(旧根本村)などで出土する柳茶碗(TC-1-g)のように絵付を施したものなども

ある。なお TC-1-g のように下絵付が施された製品の他に、空兵衛窯(旧瀬戸村)や四ツ屋窯(旧土岐口村)などで出土するような上絵付が施される例も TC-1-m や TC-1-k などの中に極少ないが認められる。以上のようにバリエーションの多い 1 類の中でも 17 世紀第 4 四半期頃から見られる灰釉丸碗(TC-1-c)は出土量が多く、江戸遺跡全体で普遍的に認められる器種の 1 つである。かみた窯や高田神社窯(旧久尻村高田)などで出土する。10 類は、中でも 2 合半徳利(TC-10-a,c)が 19 世紀前半代に爆発的な出土量の増加をみせる。これは東大構内遺跡だけでなく江戸遺跡全体に共通する傾向である。TC-1-c 同様、かみた窯や高田神社窯などで出土する。29 類は TK(丹波系陶器)29 類とならんで 17 世紀代に出土する挿鉢の多くを占めるが、18 世紀以降その数が激減し、中葉頃にはほぼ見られなくなる。この器種は赤津窯(旧赤津村)などで出土する。(大成)

○D

京都・信楽系陶磁器を D とする。

京都は消費地でもあり、また、磁器・陶器・土器の生産地でもある。京都周辺でのこれらの生産は古代に遡って存在している。しかし、京都の製品が全国的に認知されるのは、陶器がいわゆる「京焼」の名称で呼ばれるようになった 17 世紀初頭以降である。それ以前には楽焼、軟質施釉陶器などが焼かれていたが、音羽、粟田口、清閑寺、清水などの諸窯が東山近辺で生産が開始され、さらに、仁清によって技術的に完成、評価を得た後にはブランド商品として急激に全国に流通するようになる。また、成立当初から茶の湯との関わりの中から画一的な製品を大量に生産するといった性格ではなく、共通の属性が抽出しにくい。ひとつは器種、器形、文様、技法が多様であることや原料の多くを移入しているため、胎土の違いによる判断ができていくこと、また、窯が市中にあったため廃窯以降に破壊され、発掘調査による成果の蓄積がないこと、18 世紀後半以降、信楽や伊賀などを含め京都と同様の特徴を有する製品を生産していることなどが原因となっている。

TD(京都・信楽系陶器)の中で最も特徴の抽出しやすい仁清風、古清水風の製品は、おおよそ以下の通りである。

- ・胎土が堅緻で、灰白色から黄白色を呈する。
- ・器面には細かい貫入が入る。
- ・底部脇以下と底部が露胎している製品が多い。
- ・鏽絵、染付、色絵で施文される例も多い。
- ・刻印は「仁清」、「清水」、「清閑寺」、「粟田口」、「帶山」、「寶山」、「京」、「岩倉」、「御菩薩池」、「岩倉山」、「音羽」、「錦光山」などがある。
- ・高台外周を面取りしている。

また、信楽は中世から長石の混入する独特の胎土を用いた焼締め陶器として生産を行っており、安土・桃山～江戸時代初期には茶陶の産地として隆盛している。江戸前期にはその流れの中で生産をしていたが、18 世紀後半以降、京焼風の製品を大量に生産する窯として方向を転換している。これは信楽のみならず京都周辺の窯が同様の動きを示し、京焼の普及品をこうした窯が生産している状況が窺える(稲垣 1991)。このような状況は両者の区別が困難な現実もさることながら、京都とその普及品の産地である信楽を区別する必要性の有無から議論しなくてはいけないだろう。以上の理由から、江戸後期以降の京都および信楽を含めた周辺地域を京焼生産を行う大きな一窯産地としてとらえ、分類では D(京都・信楽系)とした。

京都での磁器生産は陶工奥田穎川によって 19 世紀には開始されたと認識されている。穎川は呉須赤絵写しに技量を示している。それ以降、磁器は多く生産されていると推定されるが、著名な陶工の伝世品以外、製品

の様相は全く不明である。また、三田などその影響下で操業を開始した窯場もあり、京都で生産されていた磁器製品が消費遺跡の資料から抽出できるかの将来的な展望は暗いといわざるを得ないであろう。これらのことからとりあえず現段階では京都およびその周辺の磁器製品について分類項目を設けず、泉山・天草陶石を使用した肥前系製品との対比といった大きな意味でのJCとして捉えておくことにする。

土器は白色系手づくねのかわらけなど中世からの生産が引きつづき行われているが、これらの製品は大きな流通圏を形成してはいない。江戸で出土する土器のうちかわらけ、人形類、塩壺、五徳、涼炉、急須などの一部が、または深草の銘款があるものやそれに胎土、成形、器形などが類似するものについて京都周辺といった生産地推定がなされている。詳細はDZの項を参照されたいが、江戸出土土器に関する生産地の推定を大きく妨げている原因であろう生産地の調査の問題、粘土の移動の問題、刻印の問題、型の移動の問題などが未解決である現状において、個々の生産地の推定を行えないと判断し、とりあえず白色系を呈する製品についてもDZとして一括しておく。

東大構内遺跡では、1類(碗)、2類(皿)、4類(爛徳利)、5類(鉢)、6類(坏)、9類(香炉・火入れ)、10類(瓶)、13類(蓋物)、15類(壺・甕)、18類(香炉)、19類(水滴)、22類(花生)、24類(灰落し)、25類(鬘水入れ)、27類(水注)、32類(柄杓)、34類(土瓶)、40類(油受け皿)、46類(カンテラ)、49類(涼炉)、50類(五徳)、51類(塩壺)、60類(人形)などがあるが、最も量的に多いのは1類である。(堀内)

○E

備前系陶磁器をEとする。

TE(備前系陶器)

備前は古代末より焼締め陶器の生産を行っている陶器窯である。室町時代から安土・桃山時代には西日本を中心とした広域流通圏を形成するような窯になる。特に室町末から安土・桃山にかけて茶の湯の中で粗放さが賞玩の評価対象となり、雑器とは別に茶器として生産を大きくのばしている。しかし、江戸時代では肥前系陶磁器を初めとする西日本の窯の勃興と茶風の変化によって需要が大きく落ち込むことになるが、これに対応するため、17世紀の前半から「伊部手」と呼ばれる、水籤、塗土の技法を取り入れ、薄くきれいに仕上げた製品に方向を転換させている。これらは西、南、北大窯(備前市)で生産されたが、先述した要因に加え、備前の技術を模倣発展させた堺挿鉢のようなコピー製品の登場、市場での成功は一層の後退を余儀なくされ、江戸後期には生産の縮小、効率化した天保窯といわれる連房式の窯が成立した。

江戸時代の備前系陶器は以下のような特徴がうかがえる。

- ・塗土を行う
- ・「火摺」と呼ばれる藁の焼成痕が観察される
- ・幾何学文を基調とした刻印が見られる
- ・無釉焼締め陶器である
- ・胎土は堅緻で、灰褐色、暗褐色、赤褐色、橙褐色を呈する

また、これによく類似する製品として堺系陶器挿鉢があるが、これと備前との相違についてはL(堺系陶磁器)を参照されたい。

東大構内遺跡では、2類(皿)、5類(鉢)、10類(瓶)、12類(油壺)、13類(蓋物)、15類(壺・甕)、22類(花生)、

29類(搦鉢),37類(薬研),40類(油受け皿),61類(ミニチュア)がみられるが,最も多いのは10類,29類である。
(堀内)

○F

志戸呂系陶磁器をFとする。

TF(志戸呂系陶器)

TFは,静岡県金谷町横岡周辺に展開した陶器窯である。

近世志戸呂焼の成立に関しては,複数史料による諸説が唱えられているが,大筋では天正から慶長年間にかけて美濃から来た陶工が開窯し,その技術が在地の陶工に継承され,江戸時代を通して生産されたと考えられている(足立1982)。また,志戸呂焼は,足立順司が提唱した静岡県内の施釉陶磁器編年6区分のうち,第3～第6段階に該当する(足立1990)。

第3段階の窯には上志戸呂窯,神座窯があり,天目茶碗,輪禿皿,花入れ,水注,葉茶壺,徳利,搦鉢,水指,丸皿,香炉等が表採されている。

第4段階から,窯は横岡地区に集中するようになる。現在横岡には6ヶ所の窯跡が確認されているが,延宝年間と明治初期の記録には,2基の窯があったとされることから,江戸時代の窯数は2基前後と考えられている。本期に帰属する窯には内藤窯,南窯(古)があり,天目茶碗,丸碗,葉茶壺,壺,小皿,徳利,搦鉢,水指,丸皿,香炉等が生産されている。

第5段階の窯には,南窯(新),中窯があり,油受け皿,「由右衛門徳利」,搦鉢などが,生産されている。

第6段階の窯には,新兵衛,北窯があり,「由右衛門徳利」,丸碗,葉茶壺,壺,小皿,徳利,搦鉢,水指,丸皿,香炉,煎茶器,植木鉢などが生産されている。

志戸呂系陶器は,白色微粒を含有する赤褐色,茶褐色系の素地を用い,鉄釉,鉄泥を施した焼締め陶器を特徴とする。

東大構内遺跡では,Ⅲ～Ⅶ期にかけて,2類(皿),10類(瓶),40類(油受け皿)を中心に,1類(碗),13類(蓋物),15類(壺・甕),29類(搦鉢)の出土が認められる。特に2,40類は,灯明皿とその受け皿のセットに,10類はいわゆる「由右衛門徳利」といわれている徳利にほぼ対応する。これらは,江戸遺跡を中心に多量に出土しており,江戸市場をターゲットにした戦略商品であると考えられる。(成瀬)

○G

常滑系陶磁器をGとする。

TG(常滑系陶器)

近世常滑窯は,旧北条村,瀬木村,常滑村の3ヶ村に分布する陶器窯である。

窯跡は,現常滑市街地とも重なるため,生産地での自立的な研究は困難な状態を含み,生産体制,技術,編年に関し,文献や,消費地での成果に頼るところが大きい。

近世常滑焼は,中世からの技術を継承し,大窯で大甕を中心とした窯業生産が行われていた。この状況は,寛政十一(1799)年に書かれた『万覚帳』の元禄十二(1699)年の項の大甕に関する記載や,18世紀後半に編集された『張州雑誌』の「甕窯之図」から窺い知ることができる。また,天保五(1834)年には,鯉江方救によって連房式登窯が導入されたとされている(赤羽1983)。

大甕の胎土は、長石を多量に含有するやや荒い砂粒質土で、「ヨリコ成形」といわれる粘土紐の巻き上げによって成形されている。その可視的特徴から「真焼物」「赤物」に大別されている。主たる特徴を列記すれば、「真焼物」は、茶～暗茶褐色を呈し、硬質で、表面には自然釉が掛かる場合が多い。「赤物」は、大窯で生産された製品で、褐色～赤褐色を呈し、真焼物に対し軟質で、赤土による化粧掛けが施されている例が多い。但し、これは、焼成状態の差から生じた色調、硬度の差に大きく関係しており、それだけで、厳密に区分できるものではない(中野 1996)。

江戸に流通する常滑系製品は、15類(壺・甕)に代表される。用途は、貯蔵具(水甕)、水禽類などの報告例もあるが、そのほとんどが、甕棺として利用されている。逆に言えば、江戸における土葬陶製棺は、常滑系大甕の独占市場といえる。

東大構内遺跡においては、武家地の調査で貯蔵具、貯水具などの用途が想定される15類(壺・甕)が、散見される程度であったが、病棟地点内の講安寺跡の調査によって大量の甕棺が検出された。(成瀬)

○H

萩系陶磁器をHとする。

TH(萩系陶器)

器種は碗、皿、瓶、壺、甕、仏具類、茶陶類など多岐にわたる。釉薬は土灰釉、藁灰釉、長石釉、鮫釉などが用いられている。

昭和51年から昭和63年にかけて窯の発掘が行われ多くのことが分かっている。発掘は萩市松本窯の坂1～5号窯、林1,2号窯の計7基、長門市深川窯の本窯1～5号窯、東ノ新窯1,2号窯、西ノ窯1,2号窯の計9基、併せて16基で行われた。

松本窯は、17世紀初頭に帰化した朝鮮の陶工によって毛利藩の藩窯として開窯し発展した。初期の段階では、碗類は底部にシジミ貝による貝痕を残している。また皿類も見込みと畳付に貝痕がある。このことは初期の萩焼の特徴になっている。次第に器種の細分化が進み、高麗茶碗写しの茶陶としての萩茶碗が確立される。江戸後期になると、貝目積みから胎土目積みへ移行していき、新しい器種や型物を取り入れるようになる。

深川窯は、明暦3(1657)年松本窯から分立した、半官半民窯である。初期から一部の皿類に貝目積みを用いていた以外は、砂目・胎土目積みを用いていた。また、松本窯に比べて茶陶類が少ないことや長石釉を多く用いるなど、性格を異にしていた。江戸後期になると大発展期を迎え、大型の登窯で量産されるようになる。とくに藁灰釉の開口碗とピラ掛けの碗は、特産品として量産され、江戸や大坂などにかなり運ばれている。両器種とも長門市深川窯で19世紀前葉から焼かれるようになり、本窯4号・5号窯、東ノ新窯、西ノ窯に対応する物原から大量に出土している。報告書の出土状況から、藁灰釉の開口碗の方がピラ掛けの碗よりやや先行して作られたことが分かる。また、松本窯の第三期(18世紀前半)の層から、ピラ掛けの碗、藁灰釉の開口碗が検出されているが、報告にもあるように、やはり年代的にやや問題があるようである(山口県教育委員会1990)。

江戸遺跡の出土状況を見ると、あまり量は多くないが、ほとんどがピラ掛けの碗、藁灰釉の開口碗である。武家屋敷跡では、上杉家中屋敷、尾張藩麹町邸などの大名家で確認されているが、大名家以外にも御鷹匠同心組屋敷など中下級武士階級の居住地でも確認されている。また、町屋跡では、栗鴨町屋上組や大店がほとんど無かったとされる芝神谷町町屋でも検出されている。

東大構内遺跡でも、1類(碗)の藁灰釉の開口碗(TH-1-a)、ピラ掛けの碗(TH-1-b)が検出されている。いずれも、東大編年Ⅷ期に属する遺物と供伴しており、窯の年代とも合致する。(大貫)

○I

萬古系陶磁器をIとする。

T I (萬古系陶器)

萬古系陶器は三重県四日市市の北東にある朝日町に、元文年間(1736～41)に伊勢の商人、沼波五左衛門(弄山)が窯を開いたのが始まりだとされている。京焼を手本に国内外の茶陶を写し、錦窯(上絵窯)による中近東や中国の絵、更紗文様などを描いているのが特徴とされている。「萬古」、「萬古不易」の刻印を押している。文化年間(1804～18)に一応窯を閉じた。この窯を古萬古としている。

天保二(1831)年に桑名の商人、森与五左衛門(有節)と弟の与平千秋が古萬古を再興し、これを有節萬古という。有節萬古も上絵を特徴とし、古萬古の異国的模様に対して有節萬古は大和絵を画題とした。また、古萬古は抹茶道具を中心としたのに対し、有節萬古は当時流行していた煎茶道具をさかんにつくった。特に木型による急須は森有節が始めたとされている。萬古系陶器は、伊勢路を中心に四日市萬古、射和萬古、松坂萬古、桑名萬古などがあり、また東北地方にも有節萬古の流れを汲む窯が作られた。

萬古系陶器の技術が広く伝わり、中でも急須が多く作られたのは当時の煎茶の流行と玉露が製造されたことが大きく関係していると考えられる。上絵の技法は粉彩の影響も考えられるが、直接的には宜興窯の茶陶からの影響とおもわれる。

萬古系陶器が出土し始めるのは19世紀初頭頃からで、本郷追分遺跡からは碗が出土している。轆轤成形、鉄絵竹文、「萬古」の刻印がある。鰻縄手御先手組屋敷遺跡の遺構外から碗、小坏、皿が出土している。いずれも轆轤成形で胎土は灰色または暗灰色で、「萬古」または「日本万□」の刻印が付されている。同遺跡からは19世紀中頃以降に急須が多く出土しているが、明治に入ってからのもが多い。東大構内遺跡では幕末以降に6類(坏)、16類(急須)、21類(植木鉢)などが出土している。出土量は16類が器種の大半をしめている為、その特徴を16類に限定し、あげてみる。

- ・刻印は「萬古」、「萬古不易」、「萬古有節」、「日本有節」、「千秋万易」などがある。
- ・成形技法は型作りがほとんどで、布目痕や指頭押圧痕がみとめられる。
- ・胎土はきめが細かく、灰色、褐色、暗紫色、白色などがある。
- ・固く焼き締まり、器壁は極めて薄い。
- ・蓋のつまみが回転する。把手に透かしや遊環がある。
- ・無釉、または焼締めの上に色絵を施している。
- ・萬古独特の練込み、切継ぎなどの装飾技法がみられる。

(坂野)

○J

大堀・相馬系陶磁器をJとする。

T J (大堀・相馬系陶器)

TJは、福島県双葉郡浪江町大堀地区周辺で生産された陶器窯で、近隣の大熊町や、相馬市でも同一の技術系統と考えられる窯跡が確認されている。しかし、窯跡の分布調査、及び考古学的調査による研究は、進んで

いるとはいえ、生産地サイドからの編年研究は未解明の部分を多く含んでいる。そのような状況のなか、関根達人によって消費地における編年観が提示された(関根 1994)。関根は、仙台城二の丸跡の出土資料を中心に、東北各県における実年代が把握可能な一括資料を用い、消費地編年を構築している。その結果、元禄年間前半には操業が開始され、各器種の形態的特徴から、瀬戸・美濃系陶器の影響を色濃く受け、18世紀代の生産が展開されたと考えている⁵⁾。

18世紀末～19世紀中葉の物原の二次堆積層と考えられている中平遺跡では、小杉碗、青緑釉土瓶、爛徳利など京都・信楽系陶器の影響が認められる製品が、多量に出土している(福島県文化センター 1989)。この背景には、相馬藩が、文化四(1807)年に、京焼の陶工、近藤陶吉郎を大堀瀬戸方として召し抱えたとされたこととの関連が指摘されているが、当初から日常雑器を中心に生産し、東北各国に供給してきた大堀・相馬諸窯が、18世紀には瀬戸・美濃系陶器を19世紀には京都・信楽系陶器を模倣した製品を生産した背景には、江戸を中心とした東日本における陶器市場を鋭敏に捉えていたことも要因の一つとして考えられよう。

一方、中平遺跡の資料では、「駒焼」が多量に出土している。「駒焼」は、鉄絵による走り駒の絵が描かれているのが特色で、文化年間頃に相馬藩窯田代窯で始まったとされている。田代窯以外で描かれるようになったのは、明治維新前後といわれている。中平遺跡出土の駒絵を有する製品には、坏が圧倒的に多く、丸碗形、腰が張る湯呑形、雅物と称される手びねりによる坏などが認められ、胎土には、灰白色と、黒色粒を多量に含む灰白色がある。走り駒は、外面や、見込みに描かれている。また手びねりによる坏には、「金重」の刻印が押印された製品が含まれる。

東大構内遺跡では、1類(碗)、6類(坏)があり、19世紀以降での出現が認められる。1類は、青緑釉が施された碗で、器面には、中平遺跡形態分類「鉢5B」同様の、立体的な造形文様が施されている。青緑釉が施された製品には、34類(土瓶)の存在も考えられるが、現段階では、祖形と考えられる京都・信楽系陶器の製品との識別が困難なため、TZ(産地不明陶器)に分類する。6類は、見込みに鉄絵による走り駒が描かれている。

また四谷三丁目遺跡では、鉄釉が施されたカップ形の脚付油受け皿(中平分類有脚受皿 11C)の出土例が報告されている。(成瀬)

○K

丹波系陶磁器をKとする。

T K (丹波系陶器)

「丹波焼」は、陶磁史の中では中世以降に現在の兵庫県多紀郡今田町一帯で生産された陶器窯である。中世には三本峠、床谷、源兵衛山、太郎三郎、稲荷山などの諸窯で無釉焼締め陶器が焼成されていたことがわかっている。江戸時代になると、上立杭(北、中、南)、下立杭(北、中、南)、南下立杭、釜屋(北・中・南)、上相野、上相野釜屋、鳶ヶ尾(東1号、東2号、西)、下相野窯など急激に窯数が増加する。そこには連房式登窯の導入、窯座制を背景にした播鉢生産にあると推定される。この播鉢は消費遺跡でも16世紀末から17世紀に東北南部から九州にかけての広範囲に出土がみられ、東大構内遺跡においても17世紀に多くの出土が確認されている。17世紀末に堺系陶器の播鉢が江戸に流通し始めて以降、急激に姿を消す。

東大構内遺跡では10類(瓶)、15類(壺・甕)、29類(播鉢)が確認されているが、そのほとんどが29類である。最も出土量の多い29類は無釉焼締め陶器で、TE(備前系)、TL(堺系)、TC(瀬戸・美濃系)に比べて器厚が薄い。底はやや小さく、体部はラッパ状に開くものが多い。胎土は灰褐色、橙褐色、赤褐色を呈し、白色の粗砂粒が

多く認められる。最大の特徴は窯積み法で、多くは播鉢の陶片を体部下端に挟み、重ね焼きするので体部下端には播目の、内面体部には陶片の痕跡が残る。これは近似した胎土を呈する信楽系播鉢の直重ね焼成法との対比の中で、識別のメルクマールとして認識される。(堀内)

○L

堺系陶磁器をLとする。

TL (堺系陶器)

堺系陶器は、生産地の様相から17世紀の末段階に備前の影響下に成立した陶器窯であると考えられるが、焼成された窯の確認はできていない。しかし、溶着遺物、窯壁、窯道具などの生産に関係する資料が出土した地点は確認されており、堺を区画する東環濠である土居川の両岸北部に集中している。製品は無釉焼締め陶器で、器種は播鉢、こね鉢、盤などであるが、播鉢が大部を占める。胎土は堅緻で、焼成の良不良によって暗褐色、赤褐色、橙褐色などを呈する。また、胎土の特徴、器形、成形などが備前、明石の播鉢にきわめて近似しており、備前産と推定されていた時期もあった。現時点で認識されている備前播鉢との主な相違点は、①塗土の有無から、あるものが備前、無いものが堺、②焼成時の焼台の痕跡の有無からあるものが堺、無いものが備前と理解されている。これは、両者の生産資料の比較から妥当であろうと考えている。また、明石との相違点は見込み中央の播目の入れ方によって交差もしくは三角形を基本にしたものが堺、放射状に入れるのが明石としているものがある(嶋谷1996)。これについては明石の生産資料が確認されたのち、あらためて検討し、位置づけたいと考えており、今回はTL(堺系陶器)として一括しておきたい。

東大構内では29類(播鉢)のみ出土している。堺系陶器播鉢の初現は医学部附属病院外来診療棟地点SK139出土資料である。SK139は元禄十六(1703)年の火災時の一括廃棄資料である。また、家畜病院地点からは底に刻印を持つ例がみられ、堺系播鉢の初期的な特徴であると認識している。刻印はほとんどが注口部に押され、扇面の中に「上長」、「上」、「上」、「上」、「上」、「上」、「兵久」が出土しており、他に「極」が渋谷区千駄ヶ谷五丁目遺跡などから確認されている。(堀内)

○M

益子・笠間系陶磁器をMとする。

TM (益子・笠間系陶器)

「笠間焼」は、茨城県笠間市で生産された陶器窯で、安永年間に信楽の陶工の技術によって、開窯したとされている。一方、「益子焼」は、近在する先行窯業地である「笠間焼」、「大堀・相馬焼」の技術を導入することによって、嘉永五(1852)年に開窯したといわれている陶器窯である。こういった技術的系譜や、製品の形態的特徴に、類似性が高いことなどにより、両者の識別が不可能であるとの見解から笠間・益子系とした。

両生産地における近世段階の窯業生産に関し、笠間に関しては考古学的調査がなく、実態は不明である。益子では、窯跡の調査が行われており、幕末から明治初期に操業していた窯に地藏院窯、大西国右衛門窯(益子町)がある。地藏院窯は、史料により安政六(1859)年から明治四(1871)年までの操業年代が与えられている。出土遺物には、坏、湯呑、徳利、灯火具、土瓶、土鍋がある。大西国右衛門窯は、大西国右衛門が明治元年に操業し、同二十年頃に廃窯になったとされている。出土遺物には土瓶、皿、鍋、徳利、壺・甕、瓶、播鉢、水鉢、花器、火入れ、灯火具などがある。初期の製品には、笠間の影響が考えられるが、灯火具のうち、脚付の油受け皿の

形態的特徴は、明らかに信楽製品の技術的特徴を受けた製品であり、両生産地が、信楽からの技術系統の影響下にある窯業地と位置付けることができる。また、このことは土瓶などの主力製品の生産地比定に対し、可視的な識別を困難にしている一要因としている。

このような状況のなか東大構内遺跡では、29類(播鉢)を笠間・益子系陶器として位置付けている。29類(播鉢)は、約3cm幅の縁帯を有す口縁形態と、外側に張り出し、内側の削りが浅い蛇ノ目高台を形態的特徴とする鉄釉が施された製品である。内面には重ね焼きによる数カ所の目跡が認められる。生産地資料では、明治元年開窯とされる大西国右衛門窯を初現としているが、東大構内遺跡出土例でも、明治期の製品を共伴し、Ⅸ期に位置付けられる。(成瀬)

○N

九谷系陶磁器をNとする。

JN(九谷系磁器)

石川県山中町に所在する九谷古窯⁶⁾などで焼成された磁器製品⁷⁾と、いわゆる再興九谷と呼ばれる磁器製品をJN(九谷系磁器)とした。

九谷古窯は出土色見片から、明暦年中には操業していたことが明らかとなっている(九谷古窯第2次調査概報1972)。廃窯時期については依然として不明であるが、文献史料などから元禄期とする説が一般的である。九谷古窯廃絶後、石川県内における磁器の焼成は途絶えるが、文化三(1806)年に京都から青木木米を招聘し、金沢の春日山において窯業を再興させた。これが再興九谷の始まりであるとされる。その後、民山窯、吉田屋窯、若杉窯などの諸窯が開窯し、近代まで引き続き焼成される。

「古九谷」を焼成した窯は九谷古窯しか確認されてない。また「古九谷」が出土する消費遺跡もわずかに数カ所⁸⁾であり、各遺跡から染付碗、白磁皿などが1,2点確認されているにすぎない⁹⁾。極めて出土例の少ない「古九谷」の特徴を強いて挙げるとすれば、ぬめりのある釉調、胎土が完全に磁器化していないものが多い、貫入が認められるものが多い、ハリ支え痕のないものが多いなどである。ただし現時点では、上記のような肉眼的特徴を持った製品に対して更に化学分析を行い、始めて「古九谷」という判断がなされている。

再興九谷については、伝世品と考古学的調査がなされた吉田屋窯(江沼郡山中町)、若杉窯(小松市若杉町)、松山窯(加賀市松山)などの出土遺物から、ある程度その様相を窺うことができる。これらの窯のうち若杉窯では磁器の他に大量の陶器が出土している。石川県内の消費遺跡からは陶器製品も確認できるが、ここでは江戸遺跡から出土している磁器製品を中心に概観する。器種としては碗・皿・鉢などが多く、赤絵や染付などが施されたものや、青手(塗埋手)の製品も認められる。ただし消費遺跡からの出土例は古九谷同様さほど多いものではなく、東大構内遺跡の他には石川県を中心に十数カ所で確認されているにすぎない。

再興九谷の特徴として以下の点が挙げられる。

- ・色絵製品に青手の手法を用いるものがある。これは吉田屋窯などに見られる手法である。
- ・窯場を限定できる銘が描かれるものがある。例えば「民山」は民山窯(金沢春日山)のみに認められる銘である。

再興九谷についても上記のような特徴が全ての製品に当てはまるものではない。また肉眼観察(胎土・製作技法など)からJB(肥前系磁器)と区別し難い製品もあり、それらについては古九谷同様、化学分析により再興九谷という判断を下している。

東大構内では磁器のみが出土しており、1類(碗)、2類(皿)、6類(坏)などの器種が確認されているが、出

土量は極少ない。

(大成)

〇〇

壺屋系陶磁器を〇とする。

T O (壺屋系陶器)

壺屋は沖縄県那覇市壺屋に位置している陶器窯である。それまでいくつかに点在していた知花窯、湧田窯などの窯場を1682年に壺屋に統合した後大きく発展する。壺屋窯出土の製品は無釉焼締め陶器の「アラヤチ(荒焼)」、施釉陶器の「ジョウヤチ(上焼)」,陶質土器の「アカムン(赤物)」に大別され、アラヤチは碗、皿、急須、火入れ、播鉢、鉢、壺、厨子甕、瓶、ジョウヤチは碗、皿、鉢、鍋、瓶、壺、香炉、灯明具、煙管、アカムンは鍋、土瓶、灯明皿、火鉢などの器種が出土している。

消費地で確認されている壺屋系陶器はアラヤチのみで、長崎、江戸遺跡などで出土している。また、伊豆諸島や小笠原諸島などには伝世資料として確認できるらしい(小田1996)。『守貞謄稿』にも「泡盛壺」と称してアラヤチの徳利が描かれていることから、壺屋系陶器も泡盛を入れる容器として都市部に流通していたと推定される。

東大構内ではアラヤチのみが出土しており、10類(瓶)、15類(壺・甕)が確認されている。

(堀内)

〇P

淡路系陶磁器をPとする。

J P (淡路系磁器)

淡路焼は、賀集民平が文政年間(1818～30)に創業したとされている。その後の努力から、磁器・陶器、轆轤・型物、粟田口・呉須赤絵・絵高麗・三彩・青磁・朱泥など多岐にわたる作風を示し、一時は御用陶器師として藩の援助を受けている。こうした作品群とは別に天保二(1831)年ごろに成功したとされる南京手黄釉陶、緑釉陶、三彩陶の小物が流行した。

これらの特徴は龍、鳳凰などの吉祥文を木型で打ち込み、交趾風の黄釉、緑釉を全面に掛けたものである。胎土は肥前系磁器に近似した白色の堅緻な胎土を呈している。

東大構内遺跡では、2類(皿)、6類(坏)、20類(蓮華)がみられる。出土する年代は東大編年のⅧ期～Ⅸ期にかけてである。

(堀内)

〇Z

生産地不明のものをZとする。

T Z (生産地不明の陶器)

江戸後期(特に19世紀を境とする時期)には、全国各地で藩財政の立て直し、藩経済の活性化を図るための殖産興業政策が展開される。窯業生産も例外ではなく、藩主導の運営による陶磁器生産が多数の藩によって行われている。これら地方窯の技術は、先行する瀬戸・美濃、肥前、京都・信楽などの大窯業地からの陶工や技術の移入によって成立している。特に陶器窯が全国的に増加した背景には、原料の選択や、製作技術・工程が磁器より容易であることが要因の一つとしてあげられ、そのため瀬戸・美濃、京都・信楽の主力商品(即ち、その時点での売れ筋商品)の写しが各地方窯で盛んに生産されている。

このような情勢のなか、本分類で扱っているTZ(生産地不明の陶器)の概念は、大きく二つに大別される。

一つには、胎質、形態の特徴、成形技法、焼成技法などの可視的特徴が、窯跡の調査などが行われ、実態が把握でき得る製品に該当しないもの。即ち、生産地の特定に対する手掛かりが皆無である製品である。

一つには、胎質、形態の特徴、成形技法、焼成技法などに先行生産地からの技術的系譜が、強く反映され、その系譜上にある特定の生産地が限定できない製品である。これは、34類(土瓶)、42類(行平鍋)に代表されるが、TC(瀬戸・美濃系陶器)、TD(京都・信楽系陶器)といった大窯業地の影響を色濃く受け、陶土の選択から器種、釉薬に至るまで模倣を試みている。また、先行する生産地、模倣する生産地における考古学的な窯跡調査の立ち後れも、生産地の限定を困難にする要因の一つになっている。(成瀬)

DZ(生産地不明の土器)

江戸遺跡出土土器・土製品からは胎土、製作技法、施文技法などに多様な様態が観察できる。土師質・瓦質、素焼き・施釉、轆轤・型・手捻りなどである。これらは生産における技術に関する属性であり、生産地の問題と密接な関連性を持っている。また、土師質の胎土のみをとっていても在地系と推定された明褐色から褐色を呈する一群のほかに、それとは異なる白色系の一群があり、これらから複数の生産地の存在は研究者の共通認識となっている。しかし、これまでの研究の中で生産地についての論議はあまり活発ではない。出土土器の相当量が隅田川沿岸地のものであろうことは認識されているが、個々を取り上げての議論はなされておらず、それらは総括され「江戸在地系土器」として位置づけられている。これは生産地自体の調査の問題、粘土の移動の問題、刻印の問題、型の移動の問題などが生産地の推定を大きく妨げている原因といえる。これらの問題が未解決である現状において、個々に生産地の推定を行えないと判断し、今回の分類では土器をDZとして一括しておく。

当時江戸の土器は、豊島郡今戸村において焼かれていたと推定される。今戸で焼かれていたところから、「今戸焼」と呼称されるようになった。今戸村は隅田川に接し、待乳山の麓・山谷堀の河口に位置し、海運業の要害の地であった。今戸で土器の製作が行なわれていたことが文献に初見されるのは、元禄六(1693)年刊行『西鶴置土産』巻三「思わせ姿今は土人形」の項である。また、同元禄頃(1688～1703)の戸田茂暉の随筆集に「花川戸浅草焼」(花川戸は今戸付近の別名)、宝暦十三(1763)年の風来山人(平賀源内)著『風流志道軒伝』に書かれた「…今戸焼…」などがあげられる。以上のことから18世紀前半は「浅草焼」と呼ばれ、18世紀中葉頃から「今戸焼」と呼ばれるようになったと推察される。

「今戸焼」の起源については、明治十一(1879)年刊行黒川眞頼の『工芸志料』に天正年間(1573～1592)に瓦・土器の生産を始めたと書かれている。益井邦夫は慶長六(1609)年『見聞集』の記録にも着目し考察を行ったが、明白な結果を出すことは困難であるとしながらも、およそ天正期から明暦頃に始められたとしている(「今戸焼陶考」)。『工芸志料』に貞享年間(1684～1688)土器の工人白井半七という者がいて、土風炉や火鉢等の種々の瓦器(土器)を製作しこれに倣い数戸の者が業を開いたとある。また、享保年間(1716～1736)に二世半七が「…楽焼と等しきものを製す…」とある。

東大構内遺跡の初現は東大編年Ⅰb～Ⅱ期(1616・7～1640年代)で中央診療棟地点池からかわらけ、御殿下記念館地点532号遺構からは瓦質の火鉢が出土している。また江戸遺跡から多く出土する人形、ミニチュアの初現は、Ⅲb期(1670～1682年)で、西行法師、恵比須・大黒、猿(施釉)、挿鉢がある。Ⅲb期に出土した猿の人形は透明釉が施されたものであるが、同時期において他の土製品には施釉されたものは見られない。また同時期の胎土が異なる(白色系)人形やミニチュアにも施釉したものが確認されている。

在地系と認識されている土器・土製品の胎土は、主に土師質が赤褐色・褐色・橙色、瓦質が灰色・黒灰色・灰褐色である。製品のうち、火鉢、鉢、人形等に、製作者名と思われる刻印が、押印されたものが確認されている。刻印は「源次郎」（器種不明）、「白井半七」（香合か）、「白井善次郎」（壺蓋）、「橋徳」（鉢）、「橋本徳次郎」（鉢）、「新兵衛」（不明）、「入谷 楽金」（行平）、人形、ミニチュア類では、「楽正」、「楽源」、「楽清」、「楽金」、「楽」、「二」、「三」、「亀甲に呑」等が確認されている（中野 1998）。

京都の土器生産についての歴史をみると、平安時代の文献では、栗栖野、深草が二大産地としてあげられる。土器の研究でよく使われる資料に岩倉木野の素焼窯がある。木野の土器作りは、当初は平安京西部の葛野郡嵯峨村深草里で生産し、応仁年間(1467～1469)岩倉幡枝に移り、その後元亀年間(1570～1573)に木野に移る。正徳年間(1711～1716)『京都御役所向大概覚書』「三十六」土器師之事に岩倉領土器村、幡枝、木野、小土器師－深草村等の産地が記録されている。現在三カ所の生産地が確認されている。①岩倉（栗栖野・木野）平安時代後期の白色土器が多数出土、②双ヶ丘、③醍醐寺境内・深草は調査例が少ないため実体が不明である。

江戸遺跡で出土している製品は塩壺、涼炉、五徳、急須、人形、ミニチュアなどがあげられる。涼炉や五徳はいわゆる京都系といわれている胎土を呈しているもののみである。それ以外の製品については、胎土は精緻な白色系（黄味色・白色）と褐色系（灰褐色・明褐色）の二種に分けられる。人形は型抜きをよくするための離れ剤の雲母片が顕著で器壁は薄く、描写も精緻である。刻印には原型に陽刻されたものと、成形後に押印されたものの二種で、他にヘラ書きされたものも確認されている。種類は「深草」（火鉢）、「ふかくさ 清和堂」（五徳）、「ふか草松？」同脚部に「楽？」（五徳）などがあり、人形、ミニチュアの刻印は「一重亀甲に亀（篆書体）」（原型）、「二重亀甲に亀」（原型）、「楽」（原型）、「楓山」、「京冚」、「清水カネ万」、「京 霞晴山」、「青玉山 宝□」、「治」、「帛」、「粟田口焼物師（籠書）」等が確認されている（中野 1998）。

東大構内遺跡では2類（皿）、5類（鉢）、9類（香炉・火入れ）、21類（植木鉢）、31類（火鉢）、38類（手焙り）、40類（油受け皿）、44類（ひょうそく）、45類（瓦燈）、46類（カンテラ）、47類（ほうろく）、48類（七輪）、49類（涼炉）、51類（塩壺）、52類（燭台）、54類（懐炉）、55類（泥面子・芥子面）、56類（基石形製品）、57類（玉）、58類（鈴）、59類（笛）、60類（人形）、61類（ミニチュア）、62類（面型）などが出土している。（堀内・安芸）

C、器種

器種はある器形的特徴が頻度の多い用途に反映されるであろうといった立場から、主に器形的特徴から、おおむね以下に示す特徴で定義づけを行い、下記の61器種に分類した。

- ・ 1. 碗 － 上方が開口する碗形の製品。
- ・ 2. 皿 － 上方が開口する平状の製品。
- ・ 3. 大皿 － おおむね一尺以上の皿。
- ・ 4. 爛徳利 － 器厚が薄く作られた袋物製品。
- ・ 5. 鉢 － 上方が開口する碗形、桶形、筒形などの製品のうち法量、器形から1, 7, 8類などには分類されない製品。
- ・ 6. 坏 － 小法量の高台を有する碗形の製品をさす。
- ・ 7. 猪口 － 小法量の高台の無い桶形の製品をさす。
- ・ 8. 仏飯器 － 碗形に高い脚が付く製品をさす。

- ・ 9. 香炉 - 多くは内面下半が無釉の鉢形製品。足の付く例も多い。
- ・ 10. 瓶 - 強くすばまる頸部を有する袋物製品。
- ・ 11. 御神酒徳利 - 瓶子，鶴首，円筒状を呈する小瓶。
- ・ 12. 油壺 - 扁平宝珠形の小瓶。
- ・ 13. 蓋物 - 蓋付きの碗・鉢形製品。
- ・ 14. 筆立て - 小型の筒形容器が連結したもの。
- ・ 15. 壺・甕 - 胴部と縊れる頸部を有する袋物製品。
- ・ 16. 急須 - 注口と横，後，上のいずれかに把手を有する蓋付きの茶器。
- ・ 17. 爛鍋 - 蓋付で，注口と山形把手が付く深鉢形の製品。
- ・ 18. 合子 - 小型の蓋物。
- ・ 19. 水滴 - 型物および土瓶形をした小形製品。
- ・ 20. 蓮華 - スプーン状の製品。
- ・ 21. 植木鉢 - 底部中央を穿孔してあり，多くは桶形を呈する製品。
- ・ 22. 花生 - 多くは盤口形，尊形を呈した瓶形製品。
- ・ 23. 片口鉢 - 口縁部に注口を有する鉢形製品。
- ・ 24. 灰落し - 口縁部が内傾する筒形または長筒形の製品。通常は内面無釉である。
- ・ 25. 鬢水入れ - 平面長楕円形を呈する盥形製品。
- ・ 26. 茶入れ - 小型の壺形茶道具。肩衝，大海，茄子，文琳などの形状がある。
- ・ 27. 水注 - 注口と把手を有する蓋付の製品。通常高台が付く。
- ・ 28. 漫瓶 - 広口の注口と把手が付く「平瓶」状の製品。
- ・ 29. 播鉢 - 内面に播目を有する鉢形製品。
- ・ 30. 餌入 - 輪状，T字状の把手が付く鉢形小製品。
- ・ 31. 火鉢 - 多くは箱形，筒形，太鼓形を呈する，三足付きの製品。
- ・ 32. 柄杓 - 柄の取付部を有する筒形碗状の製品。
- ・ 33. 鍋 - 蓋付で外面下半無釉，上半から内面施釉の鉢形製品。
- ・ 34. 土瓶 - 蓋付で注口と別胎質の持手を上につけるための把手を有する注器。
- ・ 35. 戸車 - 中央に孔を有する円盤状の製品。
- ・ 36. ちろり - 蓋付で，注口部，持手がつく薄手の筒形製品。
- ・ 37. 薬研 - 中央に角孔を有する円盤状製品と深い舟形の鉢形製品で構成される。
- ・ 38. 手焙り - 横に窓を有するドーム形製品。
- ・ 39. おろし皿 - 見込みに卸し目を有する皿形製品。
- ・ 40. 油受け皿 - 見込みに鑊状の受けを有する皿。
- ・ 41. 油徳利 - 頸部下方に中に液が垂下する孔と鑊状の仕切を持つ把手付きの瓶。
- ・ 42. 行平鍋 - 把手，注口を有する蓋付の鉢形製品。片手鍋。
- ・ 43. 十能 - ちりとり状製品。
- ・ 44. ひょうそく - 碗形製品の中央に切り込みの入る長筒状の施設が付く製品。
- ・ 45. 瓦燈 - 見込み中央に脚付の皿が一体となった盥形製品およびドーム状の風除けとで構成される。

- ・46. カンテラ　－壺形の胴部より1～2基の小型の皿が張り出した製品。
- ・47. ほうろく　－薄手で平鍋状製品。把手が付くこともある。
- ・48. 七輪　　－胴部下位に一つの風口を有する鉢形製品。多くは3足が付く。
- ・49. 涼炉　　－胴部中から下位に風口を有する筒形、胴張形を呈する茶道具。
- ・50. 五徳　　－環状の製品に垂直に3～5基の棒状突起を有するもの。
- ・51. 塩壺　　－コップ形の土製品。轆轤作り、板作り、輪積みなどがある。
- ・52. 燭台　　－中央に燭を立てる錐状の突起を有する。
- ・53. 蒸し器　－体部下半から底部にかけて複数の小穴が穿たれている製品。
- ・54. 懐炉　　－円盤形、角板形、小判形を呈する小型製品。
- ・55. 泥面子・芥子面－片面に文字、絵柄などが型作りされる製品。円盤状の製品が多い。
- ・56. 碁石形製品－小型の凸レンズ状を呈する製品。
- ・57. 玉　　－小型の球状を呈する製品。
- ・58. 鈴　　－スリットが入る中空製品とその中に入る小球で構成される。
- ・59. 笛　　－吹いて音の出るもの。
- ・60. 人形　　－人、動物などを象った製品。
- ・61. ミニチュア－以上の器種に近似する形態を有するが、想定される用途に使用できないと思われる小型製品および建造物を象った製品。
- ・62. 面型　　－土製面子の型。
- ・00. 蓋　　－碗、蓋物、合子、急須、土瓶、壺、水注、鍋、行平鍋、ひょうそく、火消壺、塩壺などの蓋。

【註】

- 1) 長佐古 1992, 榊淵 1997 に詳しい。
- 2) ここで扱う「器種」とは機能・用途に基づく分類単位で、結果的に一定の器形的特徴に反映される。この下位分類である「小器種」は時間的に前後して出現するものの、同じ型式組列上に連なる新旧型式の関係にはなく、また、価格、分量、蓋の有無など種々の要因によって少しずつ機能を異にしている。いわば「形式」(＝器種)の中の異なった「小形式」(＝小器種)であるとみるべきで、端反形碗や筒形碗など「器種」の中の器形的相違は「小器種」と称するのが妥当であると考えている。ただ、この分類では時間的に変化する技法などの属性を分類基準としているものも含まれており、「小器種」とはいえないものも内包している。
- 3) 例えば播鉢。
- 4) 櫻庭美咲氏によると、ドイツ、ライン川流域では16世紀から18世紀にかけて盛んにストーンウェアが作られており、胎土などからドイツ、レーレン地方の16世紀後半のものではないかとしている。17世紀中頃の遺構から検出されているが、いつ頃日本に輸入されたのかは不明である。
- 5) 関根は、『東北大学埋蔵文化財調査年報』10において、「相馬藩における近世窯業生産の展開」と題した論考を公にしている(関根 1998)。そこでは、相馬藩領内の窯跡分布と製品の特徴から双葉郡の浪江・大熊・双葉の3町内の窯跡(大堀相馬焼)と、相馬市内の窯跡(小野相馬焼)に大別し、前者に関しては、消費地出土の一括資料を中心に、後者に関しては、窯跡表採資料の組成と、個別器種の型式変化を中心に編年案を提示している。さらに両窯跡群の技術系譜を製品、窯構造、窯詰技法から、

それぞれの生産内容や、動向を明らかにし、相馬藩領内における陶器生産の特質について検討を行っている。

- 6) 九谷古窯は、昭和 45 (1970) 年から 5 次にわたり調査され、白磁、青磁、染付などの他、陶器片も出土している。器種には鉢、皿、盤、碗、壺類、香炉などがある。その他「明暦式歳 九谷 八月」と染付で書かれた色見用の破片も出土している(九谷古窯第 2 次調査概報 1972)。
- 7) これらは再興九谷に対する呼称として以後「古九谷」と呼称する。なおこの「古九谷」とする中には、古九谷様式と称される JB (肥前系磁器) は含まない。
- 8) 石川県の八田中遺跡、木之新保遺跡、耳聞山遺跡、八間道遺跡、九谷 A 遺跡と、東大構内遺跡中央診療棟地点(大聖寺藩邸跡)からの出土例しかないようである。これらの遺跡から出土した古九谷については化学分析により「古九谷」とあるとの最終的な判断が下されている(藤田 1995, 1997, 山崎 1994)。
- 9) 例外的に八間道遺跡からは染付四方鉢、九谷 A 遺跡からは色絵片、東大構内遺跡からは色絵皿なども出土している。

補：生産地・器種に関する変更点

生産地については、輸入陶磁器が以前には「A」として一括されていたのを A1 (景德鎮窯系)、A2 (漳州窯系)、A3 (徳化窯系)、A4 (龍泉窯系)、A5 (宜興窯系)、A6 (朝鮮)、A7 (ベトナム)、A8 (ヨーロッパ) の 8 地域に細分を行った。

ある器形に特定の用途が想定できるものについてひとつの器種として取り上げるといった基本的な立場から、器種では大きな変更を行い、新番号を付与した。変更の詳細は別項<家畜病院地点からの変更点>を参照されたい。蓋(従来の 14 類)は、器種として独立したものではないとの判断から、数量の呈示は行いが、定量分析の対象から除外するものとして 00 類とした。

<家畜病院地点からの変更点>

以下は年報1に掲載している家畜病院地点の陶磁器・土器分類表、及び、主要遺構出土遺物組成表（東京大学構内遺跡調査研究年報1：P.147～152）のデータを、今回再提示した東大構内遺跡出土陶磁器・土器類の分類表に参照して使用できるようにした対応表である。「旧」の項目が家畜病院地点で提示した分類項目、「新」の項目が今回新たに提示した分類項目である。本表の見方として、樹形図のように示したものは調査・研究の進展に伴い家畜病院地点で提示した項目について幾つかに分化させた事や、逆に分化していたものを一つに統括した事を示す。一対一に提示しているものは、単純にその項目が削除されたか、あるいは分類する場所を変更した事を示す。各項目の分化・統括・削除・分類箇所の変更理由については、次年度年報の分類項目ごとの説明に譲るものとする。なお頁の都合上、各分類項目の内容が一部わかりにくいものとなっているが、詳細については写真図版を参照されたい。

旧	新	旧	新
JA (輸入磁器)	JA1 (景德鎮窯系) JA2 (漳州窯系) JA3 (徳化窯系) JA4 (龍泉窯系) JA6 (朝鮮) JA8 (ヨーロッパ)	JC-3-a (木型打込)	JC-2-d (木型打込)
		JC-3-b (丸皿)	削除
		JC-4 (型皿)	JC-3-e (陽刻) JC-3-f (陰刻)
		JC-10-b (瓶子形)	JC-11-a (瓶子形)
		JC-10-c (御神酒徳利)	JC-11-b (鶴首形)
		JC-10-d (爛徳利)	JC-4 (爛徳利)
		JC-11 (仏花器)	JC-22 (花生)
JB-1-g (いわゆるくらわんか)	JB-1-g (いわゆるくらわんか) JB-1-r (朝顔形) JB-1-v (梅樹文) JB-1-w (高台径大、腰張碗) JB-1-x (見込み蛇ノ目袖剥ぎ)	TA (輸入陶器)	TA5 (宜興窯系) TA6 (朝鮮) TA7 (ベトナム) TA8 (ヨーロッパ)
JB-1-h (高台径小、腰張碗)	JB-1-j (小丸碗)	TB-1-d (刷毛目丸碗)	TB-1-d (渦巻刷毛目丸碗) TB-1-g (打、波状刷毛目丸碗)
JB-3-a (高台高低)	削除	TB-1-e (刷毛目筒形碗)	削除
JB-3-b (輪花)	JB-2-q (高台断面 [U]、輪花)	TB-26 (甕)	TB-15 (壺・甕)
JB-3-c (高台断面三角)	JB-2-b (ダンバギリ窯指標)	TC-1-e (長の)	TB-1-m (京焼風半球形碗)
JB-3-d (蛇ノ目凹形高台)	JB-2-j (蛇ノ目凹形高台低)	TC-1-t (しのぎ)	削除
JB-4-a (糸切細工貼付高台)	JB-2-r (糸切細工貼付高台)	TC-2-d (志野袖印花皿)	削除
JB-4-b (型作り)	JB-6-e (型作り、慣用名：紅皿)	TC-5-b (摺絵鉢)	TC-2-e (摺絵皿)
JB-10-b (瓶子形)	JB-11-a (瓶子形)	TC-5-e (水甕)	TC-15-c (水甕)
JB-10-c (御神酒徳利)	JB-11-b (鶴首形)	TC-5-g (緑袖鉢、貼付文など)	TC-15-d (緑袖鉢、貼付文など)
JB-10-d (爛徳利)	JB-4 (爛徳利)	TC-10-a (三合徳利、テ ^レ 肩)	TC-10-a (二合半、底部袖拭取)
JB-11 (仏花器)	JB-22 (花生)	TC-10-b (三合徳利、底部袖拭取)	
JB-13-d (蓋物、瓢箪形)	削除		
JB-36 (盤)	削除		

旧	新
TC-10-g (糸目柿釉一升徳利)	TC-10-g (柿釉徳利)
TC-10-i (べこかん徳利)	
TC-10-j (薄手爛徳利)	TC-4 (爛徳利)
TC-11 (仏花器)	TC-22-a (盤口形) TC-22-b (朝顔形)
TC-24-a (火入れ)	TC-9-g (筒形)
TC-24-b (灰落し)	TC-24-a (しのぎ) TC-24-b (長筒形)
TC-26-a (半胴甕)	TC-15-a (赤津半胴)
TC-26-b (柿釉灰釉流掛け甕)	TC-15-b (柿釉灰釉流掛け甕)
TC-31-a (火鉢)	TC-31 (その他) TC-31 (火鉢)
TC-31-b (瓶掛)	TC-31-a (瓶掛)
TC-40-a (錆袖脚付)	削除
TC-44 (ひょうそく)	TC-44 (その他) TC-44 (ひょうそく) TC-44-a (ひょうそく脚付)
TC-48 (焜炉)	削除
TD-1-a (高台丸成形)	削除
TD-1-f (折枝梅花文)	TC-1-z (折枝梅花文)
TD-8 (仏花器)	削除
TD-10 (瓶)	TD-10 (瓶) TD-36-b (ちろり, 段筒形)
TD-11 (仏花器)	TD-22 (花生)
TD-12 (油壺)	削除
TD-24-a (火入れ)	TD-9-c (筒形)
TD-24-b (灰落し)	TD-24 (灰落し)
TD-26 (甕)	TD-15 (壺・甕)
TD-33 (鍋)	削除
TE-10-b (べこかん徳利)	TE-10-a (献上手)
TE-13 (蓋物)	削除
TE-24 (喫煙具)	削除

旧	新
TE-26 (甕)	TE-15 (壺・甕)
TF-9 (香炉)	削除
TG-26-a (甕, Y 字状口縁)	TG-15 (壺・甕)
TG-26-b (甕, T 字状口縁)	
TI-5 (鉢)	削除
TZ-14-m (鉛釉行平蓋)	DZ-14-m (行平蓋)
TZ-14-o (鉛釉土瓶蓋)	DZ-14-n (土瓶蓋)
TZ-33-b (爛鍋)	TZ-17 (爛鍋)
TZ-34-j (鉛釉土瓶)	DZ-34 (土瓶)
TZ-42-d (鉛釉行平)	DZ-42 (行平)
TZ-54 (懐炉)	削除
DZ-24-a (火入れ)	DZ-9 (香炉・火入れ)
DZ-31-a (土師質火鉢)	DZ-31-a (土師質丸火鉢) DZ-31-e (土師質角火鉢) DZ-31-l (土師質筒形火鉢)
DZ-31-b (瓦質火鉢)	DZ-31-b (軟質瓦質丸火鉢) DZ-31-d (硬質瓦質丸火鉢) DZ-31-f (軟質瓦質角火鉢) DZ-31-g (硬質瓦質角火鉢) DZ-31-j (軟質瓦質筒形火鉢)
DZ-33-a (鍋丸底)	DZ-47-a (ほうろく丸底)
DZ-33-b (鍋平底)	DZ-47-b (ほうろく平底)
DZ-44-a (ひょうそく脚付)	DZ-44-a (ひょうそく無袖脚付) DZ-44-f (ひょうそく施袖脚付)
DZ-44-b (ひょうそく脚無)	DZ-44-b (ひょうそく透明袖脚無) DZ-44-c (ひょうそく無袖脚無)
DZ-47 (たんころ)	DZ-44-e (そろばん玉形)
DZ-48-a (風炉)	DZ-31-h (風炉)
DZ-48-b (七輪)	DZ-48-a (丸形七輪) DZ-48-b (箱形七輪)
DZ-48-c (涼炉)	DZ-49 (涼炉)
DZ-49 (火消壺)	DZ-31-i (火消壺)

【参考・引用文献】

- 愛知県陶磁資料館・関西近世考古学研究会 1997『シンポジウム呉須赤絵と漳州窯系磁器』
- 青木重雄 1981「民平焼と淡路のやきもの」『日本やきもの集成』7 近畿Ⅱ 平凡社
- 赤羽一郎 1983『常滑 陶芸の歴史と技法』技報堂出版
- 足立順司 1982「志戸呂とその周辺」『日本やきもの集成』2 東海甲信越 平凡社
- 1990「静岡県下の施釉陶磁器」『江戸の陶磁器』第3回江戸遺跡研究会大会発表要旨 江戸遺跡研究会
- 井汲隆夫 1991「江戸遺跡出土のやきもの分類」『四谷三丁目遺跡』新宿区四谷三丁目遺跡調査団
- 1992「検出遺物の概要と整理方法」『内藤町遺跡』新宿区内藤町遺跡調査会
- 石川県教育委員会ほか 1972『九谷古窯 第1次調査概要』
- 1972『九谷古窯 第2次調査概要』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1995『九谷A遺跡』
- 稲垣正宏 1991「大津市南部地区における近世窯業の展開」『関西近世考古学研究』Ⅰ 関西近世考古学研究会
- 岩生成一 1973『京都御役所向大概覚書』下巻 清文堂
- 岩橋陽一 1994「3 遺物」『東京都千代田区丸の内三丁目遺跡』東京都埋蔵文化財センター
- 大川 清・大門直樹 1990『益子の近代陶業遺跡』考古学研究室報告 乙種第6冊 国士館大学文学部考古学研究室
- 大橋康二 1984「肥前陶磁の変遷と出土分布」『北海道から沖縄まで 国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館
- 1992『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 大橋康二・尾崎葉子 1988『有田町史』古窯編 有田町
- 岡 泰正 1993「オランダ・マーストリヒトにおけるレグウート窯の陶器について—江戸時代後期のオランダ陶器受容に関する基礎資料—」『長崎出島の食文化』財団法人親和銀行ふるさと振興基金
- 1996a「平安京左京六条三坊七町出土のヨーロッパ製転写磁器について」『平安京左京六条三坊七町 京都市下京区小田原町・東鋸屋町』京都文化博物館調査研究報告第11集
- 1996b「新地唐人荷蔵跡出土のヨーロッパ製磁器について」『新地唐人荷蔵跡』長崎市埋蔵文化財調査協議会
- 小田静夫 1996「東京都汐留遺跡出土の壺屋焼陶器について」『汐留遺跡』汐留地区遺跡調査会
- 加藤唐九郎編 1972『原色陶器大辞典』淡光社
- 河島達郎・小木一良 1991『古九谷の実証的見方』創樹社美術出版
- 黄汉杰・徐国芬・卢金漳 1993「德化古瓷装饰艺术」『福建文博』福建省博物館
- 小林謙一 1996「江戸在地系土器と江戸出土土師質壺類の編年」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』江戸陶磁土器研究グループ
- 近藤京嗣 1983「関東地方の近世陶磁」『世界陶磁全集』9 江戸(四) 小学館
- 西園寺 歩 1980『煎茶の道具』雄山閣
- 茶道資料館 1990『遺跡出土の朝鮮王朝陶磁—名碗と考古学—』
- 嶋谷和彦 1996「堺播鉢の生産と流布」『考古学ジャーナル』No.409 ニュー・サイエンス社
- 上海人民美術出版社+美乃美 1982『宜興紫砂』中国陶全集23
- 白神典之 1988「堺播鉢について」『堺環濠都市遺跡(SKT79)発掘調査報告』堺市教育委員会
- 1992「堺播鉢考」『東洋陶磁』19 東洋陶磁学会
- 鈴木裕子 1995「日本出土のオランダ陶器—17・18世紀を中心に—」『オランダ陶器』朝日新聞社

- 関口廣次 1988「隅田川沿岸の窯業」『古文化談叢』第20集
- 関根達人 1994「第三章 仙台城二の丸跡第5地点調査成果の検討 2. 陶磁器」『東北大学埋蔵文化財調査年報』7 東北大学埋蔵文化財調査委員会
 1998「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大学埋蔵文化財調査年報』10 東北大学埋蔵文化財調査研究センター
- 瀬戸市教育委員会 1990『尾呂』
 1992『東本町A窯跡』
- 瀬戸市教育委員会・瀬戸市埋蔵文化財センター 1993『経塚山西窯跡』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第5集
- 瀬戸市史編纂委員会 1988～1993『瀬戸市史』陶磁史篇1～6
- 瀬戸市埋蔵文化財センター 1996『赤重窯跡』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第12集
- 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1997『千駄ヶ谷五丁目遺跡』
- 田口昭二 1994「美濃窯の諸様相」『瑞浪陶磁資料館研究紀要』第6号
- 竹本紀明 1986「第一回「磁器の特色と歴史」」『瑞浪陶磁資料館年報』第6号
- 田嶋正和 1996「大聖寺藩家老屋敷跡の調査—享保14年(1729)大火に伴う資料—」『肥前陶磁の変遷—年代の確かな資料をもとに—』第6回九州近世陶磁学会資料 九州近世陶磁学会
- 多治見市・岐阜県陶磁資料館 1994『江戸・明治・大正期の美濃の上絵展』
- 多治見市教育委員会 1993『平野西窯』多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第40号
- 續 伸一郎 1993「ベトナム製焼き締め長胴瓶・四耳壺について—堺環濠都市遺跡の出土品を中心として—」『貿易陶磁研究』No.13 日本貿易陶磁研究会
- 東京都埋蔵文化財センター 1994『東京都千代田区丸の内三丁目遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第17集
- 東京都港区教育委員会 1986『港区三田濟海寺 長岡藩主牧野家墓所発掘調査報告書』
- 都立学校遺跡調査団 1997『駒込鯉縄手 御先手組屋敷』
- 長崎県波佐見町教育委員会 1993『波佐見町内古窯跡群調査報告書』波佐見町文化財調査報告書第4集
- 長崎市教育委員会 1997『築町遺跡』
- 長佐古真也 1990「消費遺跡における陶磁器研究組成の視点とその一例—江戸市場が陶磁器生産に与える影響—」『江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会第3回大会発表要旨 江戸遺跡研究会
 1992「陶磁器研究の現状と今回の方針」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ』江戸陶磁土器研究グループ
- 中野高久 1998「江戸遺跡の考古調査から—江戸遺跡出土遺物の若干の考察 2 江戸遺跡出土の在地製品」『渋谷区 千駄ヶ谷五丁目遺跡の諸問題』
 1998「刻印、篋書きからみる「玩具類」」『江戸在地系土器の研究』Ⅲ
- 中野晴久 1987「近世常滑における甕の編年的研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要』2
 1996「常滑窯の研究—近世赤物について—」『知多古文化研究』10 知多古文化研究会
- 植崎彰一 1976『美濃の古陶』光琳社出版
- 成瀬晃司・堀内秀樹 1988「東京大学医学部付属病院新中央診療棟建設予定地点出土の「古九谷」」『考古学ジャーナル』No.297 ニューサイエンス社
 1990「消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析—東京大学構内遺跡病院地点出土資料を例に—」『医学部附属病院地点』東京大学遺跡調査室

- 那覇市教育委員会 1992『壺屋古窯群Ⅰ』那覇市文化財調査報告書第23集
- 西田記念東洋陶磁史研究グループ他 1994『SWATOW 福建省漳州窯系陶磁器についてⅡ』
- 西田宏子 1995『阿蘭陀—日本伝世のオランダ陶器』『オランダ陶器』朝日新聞社
- 長谷川 真 1988『丹波系播鉢について』『中近世土器の基礎研究』Ⅳ 日本中世土器研究会
- 服部 郁 1994『近世瀬戸窯における磁器生産の開始と展開』『研究紀要』第2輯 瀬戸市埋蔵文化財センター
- 春田 明 1993『附・近世銅版染付史』『一條家領鹿背山焼』山城ライオンズクラブ
- 兵庫県教育委員会 1992『三田市下相野窯址』兵庫県文化財調査報告第107冊
- 福島県文化センター 1989『中平遺跡』国営請戸川農業水利事業遺跡調査報告 福島県文化財調査報告書第208集
- 藤沢良祐 1987『本業焼の研究(1)』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅵ
 1988『本業焼の研究(2)一赤津村・上水野村を中心に一』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅶ
 1989『本業焼の研究(3)一下品野村・下半田川村を中心に一』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅷ
- 藤田邦雄 1995『(4)北陸地方』『東洋陶磁学会会報』第26号 東洋陶磁学会
 1997『(4)北陸地方』『東洋陶磁学会会報』第33号 東洋陶磁学会
- 福建省博物館 1990『徳化窯』
- 福建省博物館 1997『漳州窯』
- 福建省博物館・福建省考古博物館 学会・西田記念基金共同研究チーム 1994『SWATOW』
- フリッツ・スホールテン 1995『オランダのマヨリカ陶と初期デルフト陶器』『オランダ陶器』朝日新聞社
- 星 梓 1991『江戸遺跡における丹波播鉢覚書』『貝塚』45 物質文化研究会
- 堀内明博 1993『日本出土の朝鮮王朝陶磁』『MUSEUM』503 東京国立博物館
- 堀内秀樹 1991『東京都江戸遺跡出土の明末清初の陶磁器—東京大学本郷構内の遺跡を中心に—』『貿易陶磁研究』NO.11
 日本貿易陶磁研究会
 1992a『『備前系焼締め播鉢』の系譜—17世紀以降の備前播鉢及び堺播鉢について—』『東京考古』10 東京考古談話会
 1992b『東京大学本郷構内の遺跡統一編年試案』『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ』江戸陶磁土器研究グループ
 1996『東京大学本郷構内の遺跡出土陶磁器の編年の考察』『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』江戸陶磁土器研究グループ
 1997『東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察』『東京大学構内遺跡調査研究年報』1 東京大学埋蔵文化財調査室
 1998『消費遺跡出土陶磁器類の編年について—江戸遺跡を中心に—』『在地土器・陶磁器Ⅱ』東北中世考古学会
- 堀内秀樹・坂野貞子 1996『江戸遺跡出土の18・19世紀の輸入陶磁器』『東京考古』14 東京考古談話会
- 間壁忠彦 1990『備前焼』考古学ライブラリー60 ニューサイエンス社
- 益子町史編纂委員会 1989『益子町史』第5巻 窯業編 益子町
- 益井邦夫 1968『今戸焼史に関する一断片』『地方史研究』第96号 地方史研究協議会
 1970『今戸焼陶考』『國學院雑誌』第71巻第3号 國學院大學
- 榭瀨規彰 1997a『近世陶磁器・土器類の分類に関する考察』『かながわの考古学』研究紀要2
 1997b『近世陶磁器類の研究(2)一池子遺跡群 No.1—C地点出土資料の検討—』『神奈川考古』第33号 神奈川考古同人会

- 松本啓子 1993「大坂出土のオランダ色絵壺」『華火』45号 大阪市文化財協会
- 水島一耀 1967「江戸 今戸焼考(一)(二)」『陶説』第174・175号 日本陶磁協会
- 水谷英三 1981「伊勢のやきもの」『日本やきもの集成』6 近畿Ⅰ 平凡社
- 百瀬正恒・近江俊秀 1995「各地の土器様相・近畿」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 森本朝子 1992「お日様マーク始末記—あるヴェトナム陶器をめぐる—」『法哈嘩』第1号 博多遺跡研究会
 1993「ベトナムの貿易陶磁—日本出土のベトナム陶磁を中心に—」『上智アジア学』第11号
 1995「日本出土のベトナムの陶磁とその産地」『東洋陶磁』第23・24号 東洋陶磁学会
- 森本伊知郎 1987「第三章 二節 1 陶磁器」他『郵政省飯倉分館構内遺跡』港区麻布台一丁目遺跡調査会
 1989「2 遺物による遺構の年代(絶対年代)推定について」「3 陶磁器」『白金館址遺跡—研究編—Ⅲ』
 1991「江戸市中の物資流通と生活用具—遺跡出土陶磁器から—」『甦る江戸』江戸遺跡研究会編 新人物往来社
- 矢部良明 1977「宋代青磁の展開」『世界陶磁全集』12 宋平凡社
- 山口県教育委員会 1990『萩焼古窯』
- 山崎一雄 他 1994「東京大学医学部附属病院地点出土の江戸時代の陶磁器片の材質および産地」『考古学雑誌』第79巻第4号 日本考古学会
- 横田賢次郎・森田 勉 1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』4
- 栗 建安 1993「平和県明末清初青花瓷窯址調査」『福建文博』福建省博物館
 1995「福建平和县南胜，五汉古窑址1993年度调查简报」『福建文博』福建省博物館・平和县博物館

東京大学構内遺跡調査研究年報 2
別 冊 東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類 (1)

1999 年 3 月 31 日発行

編集・発行 東京大学埋蔵文化財調査室

東京都目黒区駒場 4 - 6 - 1

印 刷 森重印刷株式会社

